

日華（中日）絵画聯合展覽会について

——近百年來中国絵画史研究 七——

鶴田武良

はじめに

- 一、第一回中日絵画聯合展覽会——一九二二年 北京・天津
- 二、第二回日華絵画聯合展覽会——一九二二年 東京
- 三、第三回中日絵画聯合展覽会——一九二四年 北京・上海
- 四、第四回日華絵画聯合展覽会——一九二六年 東京・大阪
- 五、中日現代絵画展覽会（第五回中日絵画聯合展覽会）
——一九二九年 上海・大連・奉天

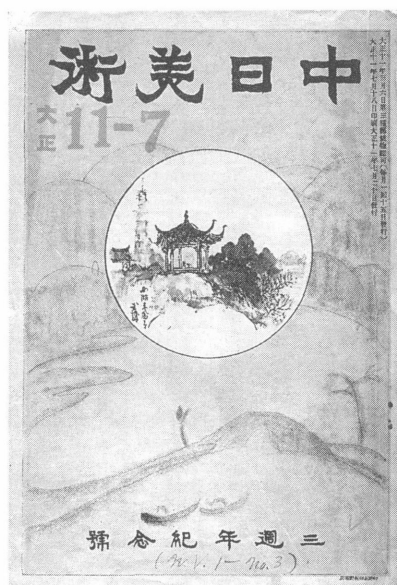
附・中日藝術同志会

はじめに

一九二〇年代、つまり大正十年から昭和四年にかけては、二十世紀において日本・中国間の美術交流が最も盛んな時期であった。それを代表するのが上海における石野哲弘（号聴泉 経歴不明）による中日美術協会の設立と同協会による中日聯合美術展覽会および中日美術会館建設計画、大村西崖、呉昌碩、王一亭などによる西湖有美書画社の設立、大村西崖の『禹域今画録』の刊行、第五回まで開催された日華（中日）絵画聯合展覽会と東方絵画協会の設立などである。

日華（中日）絵画聯合展覽会について

中日美術協会は、『中日美術会館建設趣意書』⁽¹⁾によると一九二〇年（一説に一九一九年）四月上海で発足、一九二三年一月会員組織に改め、会長に康有爲⁽²⁾、副会長に劉海粟⁽³⁾と正木直彦⁽⁴⁾、顧問に張繼⁽⁵⁾、王一亭⁽⁶⁾、黒田清輝⁽⁷⁾、伊集院彦吉⁽⁸⁾を選んだ。評議員は日中双方で百四十三名、中国側評議員には呉徴、高劍父、鄭錦、許敦谷、汪亞塵、鄭孝胥、曾農髯、呂萬、唐吉生、陳抱一など主に上海在住の著名書画家が名を列ねているのに対し、日本側は事業を通して上海と関係のある人が多い。特別会員は百九十三名、うち日本人百六十八名には今尾景年、石井柏亭、川合玉堂、高村光雲、堂本印象、岡田三郎助、藤島武二、和田英作など著名な美術家のほか、犬養毅、洪沢栄一、団琢磨、本山彦一、山本悌二郎、松永安左衛門、麻生太吉など政財界、銀行、新聞界の知名士の名が見える。中国側は二十五名、中に于右任、呉昌碩、梁啓超の名がある。会員は正会員・普通会员合わせて千三百二十二名、半数以上が日本国内居住者で、事業などで上海と関係のある人、名前から特別会員の画家の弟子と推定される人が多い。中に金鳥桂華、矢野橋村、小野竹喬などの名がある。中国側では丁悚、錢松岩、顔文樑、錢化佛、關良、倪貽德などの名が見える。



挿図1 『中日美術』 第1巻第3号表紙
東京文化財研究所蔵

「中日美術協会会則」(一九二三年一月制定) 第二条は「目的」について次のように定めている。

第二条 本会ハ中日両国藝術家ノ提携親和ヲ謀リ、互ニ両国美術ノ向上發達ヲ期スルヲ直接目的トシ、從ツテ之ニ因リ両国ノ文化的結合ト民衆ノ融和ヲ促成セシメントスルニ在リ

本会ハ目的ヲ果スタメ左記ノ事業ヲ行フ

一、毎年一回又ハ隨時、中日聯合美術展覽会ヲ開催ス、展覽会会則ハ隨時規程ス

二、中日両文ヨリナル雜誌月刊『中日美術』ヲ発行シ、内春秋二回ニ限り會員ニ無料配布ス

三、隨時両国ノ名士ニ委嘱シテ藝術ニ関スル講演会ヲ開ク

四、両国ニアル本會員ガ相互ニ旅行往來スル際ハ本会ハ諸般ノ便宜ヲ計ル五、適當ノ時期ニ於テ上海ニ中日美術会館ヲ建設ス、同会館ニ関シテハ別ニ細則ヲ規程ス

「会則」にはそのほか、會員は中日両国人であること、會員は入会金洋二弗(日金二円)、年会費二弗(日金二円)を納入する通常會員、両国の美術家

で本会の趣旨に賛同し本会を援助するため随意作品を寄附する正會員、本会に特別の功勞があると認められた特別會員の三種とすること、また役員、入会および退会についても規程し、全十二条から成る。

『中日美術』は一九二〇年四月の協会発足当初は『中日絵画月報』として刊行され、間もなく『中日美術』と改め、同時に日中両文で編集された(挿図1)。関東大震災(一九二三年九月)前までは月刊であったが、大震災により中絶、一九二四年五月に季刊として復刊した。中日美術会館は、同会館建設趣意書によると美術図書館、自由研究所、新古美術品陳列所、常設展覽会場、宿泊所、公会堂を設け、建坪約三百八十四坪、地下一階、地上二階建て、一九二四年十月に着工し、向う三カ年で完成を期し、総予算上海銀三十万兩(日本円五十万円)、建設費は本會員から寄贈を受けた作品の売却と特別會員および普通會員の「篤志ニヨル後援費」を充て、後援費は日本では東京美術学校長正木直彦、中国では国立北平美術専門学校校長鄭錦と「上海本協会」において整理するとされた。建設委員長は康有爲、建設顧問には王一亭、劉海粟、于右任、陳抱一、吳昌碩、高劍父、黒田清輝、今尾景年、竹内栖鳳、正木直彦、大原孫三郎、横山大観など日中の知名画家・名士百七十五人が名を列ねている。賛助會員は大部分が日本人で伊集院彦吉、犬養毅、団琢磨、細川護立、近衛文麿、山本悌二郎、洪沢栄一、大村西崖、石井柏亭、岡田三郎助、和田英作、堂本印象など政財界や画壇の一流人士九十九人の名が並んでいる。

上海の新聞『申報』は一九二二年二月二十日(第十五面)および四月八日(第十四面)に中日美術協会が上海日本人倶楽部で東洋画・西洋画から成る「第一回中日聯合美術展覽会」を開催したことを伝え、また、一九二四年六月十三日(第十四面)には中日美術協会が「第三回中日聯合美術展覽会」を

十月に上海で開催する予定であること、『中日美術』第三卷第六号が出版されたことを伝えた。同誌は中日美術会館の完成予想図、平面図および設計の基本的な構想を述べた上海在住の建築技師沢田退蔵の「中日美術会館の設計に就て」を掲載しているから、実現への動きはあったようである。しかし、それ以後、中日美術協会および中日美術会館の動静は伝わらない。

西湖有美書画社（別名、日支美術倶楽部）は一九二三年四月上海を訪れた大村西崖を發起人に迎えて、呉昌碩、王一亭、唐吉生などによって杭州西湖畔に設立された。⁽⁹⁾ 大村は東京美術学校校友会に四月七日付で、明日杭州で「美術倶楽部建築地検分」の予定と書き送っているから、設立計画は呉昌碩、王一亭を中心に前もって進められていて、大村の上海到着を待つて実行に移されたものと考えられる。これより先、大正十二年（一九二三）二月二十七日の『大阪朝日新聞』は、要旨次のような記事を掲載している。

西湖有美書画社は先年大村西崖が渡支の折、日支美術界の将来のため、このようなものを中国に建設したいと中国の画家たちに提唱したことが動機となって具体化したものである。發起人は王一亭、楊東山、呂萬、任董叔、哈譽、兪語霜、唐吉生の八人、すべて会員組織、大村西崖が多額の援助を与えている。倶楽部建設の土地は唐熊（吉生）が提供し、西湖に臨んで西面した三層楼五間、南面した二階建て応接室三間、コック部屋、浴室二間その他でいずれも畳敷きとし、工費は約二万弗の予算で年内完成を目指している。……發起人側は有美書画社の成績如何によつては更に天津、北京等にも同一目的の建造物を新設する意向である。

『申報』は一九二三年八月二十七日（第十八面）、大村西崖、橋本閑雪な

どが参加した日中画家共同経営の西湖有美書画社は上海を中心に会員百数十名に達し、社屋の建築工事は順調で、十月中に落成式を行う予定であることを伝えた。東京美術学校卒業の栗原誠が北京の会社を辞め、二四年九月ごろ西湖有美書画社の仕事をしていたこと、また、一九二四年五月、第三回中日絵画聯合展覽会のため北京を訪れた渡辺晨畝、荒木十畝は帰途を上海經由に⁽¹⁰⁾ 取り、一日杭州に遊び、呂萬の案内で有美書画社を訪れていることなどから、西湖有美書画社の社屋は一九二三年秋に完成、しばらくの間は日中美術交流に一役を果したと考えられる。しかし、その後の状況は伝わらない。

『禹域今画録』は、大村西崖が一九二二年十月から四ヶ月にわたつた北京、天津、南京、上海への旅行から持ち帰つた現代画家の作品六、七十点を東京と大阪で展覧した⁽¹²⁾ 後、四十三名の作品五十一件に略伝を付して一九二二年春、三百部限定で刊行したものである。金紹城、王一亭、王雲、呉淑娟など現在も名を残している画家だけでなく、沈翰、洪基、劉序易など今ではほとんど忘れられている画家が紹介されていることが注目される。同書は販賣図録を兼ねたものであるが、中国現代画家とその作品を日本に紹介した最も早い図録である。

一方、中国に日本の現代美術を紹介したのは劉海粟が最初であった。上海図画美術学校副校長劉海粟は一九一九年四月、ヨーロッパから帰朝の途中上海に立ち寄つた石井柏亭を上海図画美術学校に案内し、また、江蘇省教育会美術研究会に招いて講演を依頼した（要旨は『上海図画美術学校雑誌』第二期に掲載）。その機縁で劉海粟は同年九月第一回帝展開幕式に出席し、その後、日本の美術および美術教育を視察して帰ると、二一年五月『日本新美術的新印象』を上海商務印書館から出版した。同書は、第一篇「日本美術展覽会的鳥瞰」および第二篇「日本の藝術教育」からなり、第一篇では帝展、院展、

二科会、草土社展、日本美術協会展、女子美術学校展、日本美術学院展、農商務省工藝展について各団体の歴史、組織から始めて紹介し、第二篇では東京美術学校、女子美術学校、太平洋画会研究所など十一校を紹介している。なお、上海の新聞、雑誌は二三年頃から帝展、院展、二科展、日本水彩画会など主要な美術団体の動向やその展覧会について伝えるようになり、『申報』は二六年ごろから中国人による帝展、院展の批評を掲載するようになった。東方絵画協会の名は、正木直彦の『十三松堂日記』⁽¹³⁾大正十五年（一九二六）六月二十四日条に初めて見え、昭和十三年（一九三八）八月十二日の記載を最後とする。その記事と燃犀「東方絵画協会原始客述」⁽¹⁴⁾によると、創設の経緯は次のようであった。

日華（中日）絵画聯合展覧会は第一回以来、幹事の渡辺晨畝、荒木十畝と発起人が開催してきたが、第四回展開催を前にその規模を拡充する案が出てきた。それは経費の上でも実務の上でも画家たちの力を超えるものであった。そこで渡辺、荒木は外務省に援助を要請し、外務省は東京美術学校校長正木直彦に取りまとめを要請した。⁽¹⁵⁾正木は大正十五年二月二十八日「午後六時華族会館に岡部（長景）文化事業部長の招きにより帝展日本画部会員と共に招か」（括弧内は筆者註、以下同じ）れ、「東方美術研究会を組織し、日支両国の美術家の参加を求め、毎年交互に展覧会を開く。本年は我邦にて開くこと、而して我邦にて開くときは彼邦の画はかり、彼邦にて開くときは我邦の画はかりを陳列すること。此美術研究会に対し政府は一年三万円を補助し、之を折半して両国に頒つこと等を議定し、渡辺晨畝を急に支那に派して彼国人士の同意を求めたれば此会の成立と見なすこと」⁽¹⁶⁾を協議した。東方絵画協会の発端である。協会設立の目的は、すでに第三回まで開催された日華（中日）絵画聯合展覧会をさらに充実発展させ、継続して日中交互に開催することであつ

た。これまでも外務省は毎回、文化事業部の「対支文化事業特別予算」の費目から相当額を助成していたが、外郭団体として東方絵画協会を設立することによって、その支出をより容易にし、中国美術界に対する情報宣伝工作の強化を図ったものであろう。その背景には、一九二五年二月上海の紡績工場に端を発したストライキの青島への波及、そして五月三十日上海南京路での英国人警官による民衆の虐殺をきっかけに、各地で始まったゼネラル・ストライキなどで悪化した対日感情、排外運動の激化に対する配慮があつたと考えられる。

渡辺晨畝の「第四回日華聯合絵画展覧会ヲ日本ニ開催ニ付 渡支交渉報告書」⁽¹⁷⁾によると、渡辺は帰京数日後の（一九二六年）六月三日、それまでは発起人と幹事で運営してきた聯合展覧会の組織が変更されるとの噂を聞いた委員十名が荒木十畝と自分のところへ、事の経過と将来について相談にきたので、夜委員と会合し「東洋美術ノ向上及国際関係上名望家ニ一任シ益々此会ノ盛大ヲ期スル様後援セラレタキ旨」相談し、五日夜には上野精養軒で委員会を開催して「組織変更ノ相談ヲ為シ東方絵画協会ト改ムルニ付荒木十畝氏ト自分ヨリ其諒解ヲ求メ」承諾を得ているから、渡辺の渡華中に岡部・正木を中心に名称を東方美術研究会から東方絵画協会に変更すること、日華絵画聯合展覧会の事務を発起人から同協会に移管することなどを含めて具体化したものと考えられる。

正木によると、大正十五年六月二十四日「正午より精養軒にて金（城）・周（肇祥）両氏、日本部発起人、外務省文化部長（岡部長景）会合、東方絵画協会設立の相談を為」⁽¹⁸⁾したが、中国側との最初の協議であつた。同年七月二日、午前十時から華族会館で東方絵画協会の日華双方の幹部が会合して協会の章程を日華両文で起草し、午後三時になって完成した。東方絵画協会

の成立はこの日と見るべきであろう。

「東方絵画協会会則」⁽²⁰⁾は全九条、日文の主な内容は次の通りである。

第一条 本会ノ名称ハ東方絵画協会トス

第二条 本会ハ日華両国画家合同シテ東方絵画ノ研究開発ヲ為スコトヲ目的トス

第三条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

会長 二名

副会長 四名以内

幹事 四十名以内

第四条 本会内ニ日本部及中国部ノ両部ヲ置ク

第六条 本会ハ左ノ事業ヲ行フ

一、絵画展覧会ノ開催

二、日華両国画家ノ藝術上ノ往来及考察

三、其ノ他東方絵画研究開発ニ関スル事業

第七条 絵画展覧会ハ隔年ニ交互両国都市ニ於テ開催スルモノトス

第八条 本会事業ニ対シ共同籌得シタル助成金ハ其ノ都度両部ニ折半使用スルモノトス

スルモノトス

第九条 本会事務所ハ当分ノ間左記ノ場所ニ置ク

東京 北京

中華民國発起人代表として金紹城⁽²¹⁾(以下通行に従い金城とする)、周肇祥⁽²²⁾の二人、日本側は発起人代表として正木直彦、川合玉堂、横山大観、小室翠雲、

結城素明、荒木十畝、小堀鞆音、竹内栖鳳、都路華香、菊池契月、山元春挙、渡辺晨畝の十二人がそれぞれ署名押印した。協会の代表には正木直彦が就任し、事務所は東京美術学校内に置かれた。

事務所は東京美術学校内に置かれた。

第四回日華絵画聯合展覧会終了後、東方絵画協会中国側代表のひとり金城は北京への帰途上海で客死したが、中国側はもうひとりの代表周肇祥を中心に北京本部を活動させ、同年十二月東方絵画協会中国部会長に徐世昌、副会長に汪大燮、熊希齡、幹事に周肇祥、顔世清、陳漢第、江庸、陳年、凌文淵を選任した。明けて一月日本側はその通知を受け、二月二十二日に華族会館で会合し、日本側会長に清浦奎吾、幹事に正木直彦、横山大観、川合玉堂、荒木十畝、小室翠雲、結城素明、小堀鞆音、渡辺晨畝、竹内栖鳳、山元春挙、菊池契月、都路華香、下村観山の十三人を選び、副会長は当分空席とすることにした。ところがその後間もなく、北京本部の指導権をめぐる周肇祥と金城の遺子金開藩⁽²³⁾の間に内紛が始まったため、一九二七年春に予定されていた第五回中日絵画聯合展覧会は延期せざるを得なくなった。同年十一月正木直彦は渡辺晨畝、溝口禎次郎、田辺碧堂、北浦大介を伴って両者間の調停のため北京に行ったが、不調に終わった。⁽²⁴⁾

東方絵画協会は予定していた日華絵画聯合展覧会の代りに、一九二八年十一月「唐宋元明名画展覧会」を東京府美術館で開催した。また、一九三一年四月、日華古今絵画展覧会委員会が宋元明清名画展覧会と中国現代絵画展覧会をひとつにした「日華古今絵画展覧会」を開催したが、委員会の成員は東方絵画協会の委員と同じであった。委員会は協会の身代わりとして組織されたものであった。

その後も周・金間の内訌は解消せず、日本側は一九三〇年春、東方絵画協会の中国側との協約を一旦解約した。⁽²⁵⁾なお、金開藩、周肇祥間の軋轢については、本稿「中日現代絵画展覧会(第五回中日絵画聯合展覧会)」の項で詳しく述べたい。

しかし、東方絵画協会自体は存続し、一九三四年には孫潤宇と在天津の高

挿図 2 昭和9年
『日華聯合絵画展覧会目録』表紙 筆者蔵

野山関係者が取りまとめた日本での現代中国絵画展示販売会を同協会主催、外務省・文部省後援「日華聯合絵画展覧会」として東京府美術館（五月二十三日から六月三日まで）と名古屋美術倶楽部（六月）で開催し、三千円を補助した。⁽²⁶⁾ 東京会場では中国画六百四十九点、日本画七十三件を記した『日華聯合絵画展覧会目録』（全五十八頁、写真一枚、縦十八・八センチ、横十二・六センチ）が出版された（挿図2）。また、九月には満州国皇帝に献上する日本画二十点を展示した「日満合同美術展」（会場・新京商業学校）を満州帝国美術同人院と共催し、正木、小室、前田青邨などが渡満した。⁽²⁷⁾ 休眠状態にあった東方絵画協会としては、日中双方に向けて存在意義を示す必要に迫られていたものであろう。しかし一九三七年七月、日中戦争が始まると、活動は完全に停止せざるを得なくなったようである。『十三松堂日記』昭和十三年（一九三八）八月十二日条に、「……岡部子爵と今度渡支に付、東方絵画協会を如何に取扱ふべきかに付て協議したり……」と見えるのを最後に、以後東方絵画協会の名は現れない。

日華（中日）絵画聯合展覧会の概略については、すでに吉田千鶴子氏が「大村西崖と中国」の中で述べられているが、本稿では五回の展覧会につい

てその経緯を紹介する。日華絵画聯合展覧会は、日本で開催のときはその名称を用い、中国で開催するときは「中日絵画聯合展覧会」の呼称を用いている。本稿では開催地での名称に従った。

一、第一回中日絵画聯合展覧会

——一九二二年 北京・天津

日華絵画聯合展覧会が開催に至った経緯について、終始同展の中心人物であった渡辺晨畝は「日支画会創立の回顧」⁽²⁹⁾に次のように述べている。

私は大正七年（一九一八）の七月、日支画界の聯絡に関する考えを起し、九月北京に参つたのでありますが、支那の古名画、古美術、古建築等を見て、是れ単に東洋美術として誇るのみならず、実に世界の大美術として尊重すべきものなるを感じ、此の如き藝術を有する隣邦と我邦藝術家の接觸を為すことの相互に非常なる利益なるを思つて、益々画会創立の必要を確信し、之を坂西（利八郎）⁽³⁰⁾、秋山（昱禮）⁽³¹⁾等北京の有力者達に諮つた所、諸氏も大に賛成し、顔世清⁽³²⁾、金紹城（金城）の両氏に紹介され、私は両氏に会見して懷抱を語つたが非常の歓迎を受け、両氏から其友人の關・陳・吳諸氏に紹介されて、其所蔵の名画なども見せて貰つて支那古画の実に風韻に富み、雅致の豊かなるに今更感服し、日支の画家相提携して東洋美術の研究に努めたならば、東洋美術は将来必ず世界に雄視すべき信念を益々旺んにし、是に於て金城・顔世清・周自齊⁽³³⁾の諸氏と共に両国の聯合絵画展覧会を創立すべき計画を申合せ、更に他の諸名士にも相談して其の賛成を得ました。

其処で大正八年（一九一九）二月日本に帰り、師門の荒木十畝氏に其

由を語つた所、其れは面白からうから大に尽力しやうといふことで、氏と共に日本の諸名家、徳川（頼倫公）、洪沢（栄一）男其他の人々を訪問して賛助を乞つた所、何れも承諾を得たので、茲に川合玉堂、小堀鞆音、小室翠雲、京都の竹内栖鳳、山元春拳の諸名画伯を訪問して發起人たるんことを求め、悉く快諾を得て、愈八年（一九一九）の秋に展覧会を北京に催さうと、九月までに出品絵画二百余点を募集し、内百五十点を選んで北京に赴かう

としたところ、金城・顔世清両氏から、今北京では学生の猛烈な排日運動³⁴が起こつていて展覧会を開催すれば国際問題を惹起するかも知れないという返事を受けて見合わせた。翌一九二〇年も排日運動が、

依然熄まぬので駄目、十年（一九二一）になつても未だ山東問題などでやかましかつたが、一旦声明した事業を此儘にしては結局不成立に終る外ないから是非決行しやう。其れには万一失敗せば自分一人が責任を負ふことにすれば差支ないからと、其処で決死の覚悟をし、費用も一切自費で之に当ることにし、荒木氏の同情を得て、其力によつて出品七十余点を得、之を携へて単身青島に渡航しました。

渡辺は同地で由比（光衛・青島守備軍）司令官の協力を得て展覧会を開催、一日だけの展覧に中国人入場者が三千人に達したことに勇気付けられ、北京の各界宛の紹介状を貰つて北京に行き、公使はじめ中国側にも決心を話したところ、「金・顔の諸氏も日本の同志が其れ程までの決心をして遙々渡来をされた上は、此方も其決心をしやうと、排日は終息せざるも兎も角決行に定

つて」、「十一月の二十三日に漸く南池子の欧美同学会に於て聯合展覧会を開くことになりました」。

この企画を聞いた大統領徐世昌は自作の絵画五幅を出品した。「總統の画と支那の伝来の絵と日本からの絵画とが合せ陳列されて、小いながらも有史以来未だ無かつた企てが実現されるといふので、各方面の興味をそり、開会となるや日支両側の名士達皆觀覽に集つて門前は自動車の市を為すといふ盛況でありました。長い間如何かと思ひ煩つたことが漸く緒に就いたので、私は生れて以来此時程嬉しさを感じたことはありませんでした」。この展覧会では「徐總統、靳（雲鵬）總理、黎元洪³⁶其他各界有力者の絵画賣約等も案外多く、日本画一点に百弗以上を支那側で出したことは此会から初めての事であると当時評されました」。

「日華聯合絵画展覧会記事」³⁷に拠つて補足すると、渡辺は一九二一年十月二十二日東京を出発、二十八日山東青島着、三十日青島日本人会で將來した日本画を陳列、終了後すぐに北京に直行し、十一月三日、金城、周肇祥に面会した。二人は北京内外の排日の勢いも衰えていることから賛同し、そこで渡辺は翌四日、顔世清を訪問、また快諾を得た。それから小幡西吉公使、青木（宣純）中将、平井晴二郎博士（中華民國交通部顧問、貴族院議員）、坂西（利八郎）中将、市吉（徹夫）三菱（公司北京）支店長などを歴訪して快諾を得、併せて後援賛助を依頼し、金・周・顔の尽力で会期は十一月二十三日から三十日まで、会場は南池子石達子廟歐美（米）同学会（現存）で展覧することに決め、「日本中国聯合絵画展覧会趣旨」³⁸を中日両文で発表した。「趣旨」は日文で約千百字、奈良時代の日中文化交流から説き起し、入唐した空海、入元、入明の禪僧が日本にもたらした文物・文化の影響、さらに江戸時代の祇園南海、伊孚九に至るまで、我国の文物・制度、特に美術が中国に範を取

っていることを例を挙げて述べ、「終ニ維新ニ至ルル、明治以後泰西文明ノ移入ニヨリテ中国トノ交渉漸ク薄ク両国人民共ニ緊密ナル唇齒輔車ノ關係ヲ忘レントス、誠ニ深慨スヘキ也、吾等同志竊カニ思ヘラク、両国人士ノ輯睦ヲ敦フスルハ東洋絵画ヲ聯合研鑽シテ、ソノ蘊奥ヲ極メ以テ妙神精華ヲ世界ニ発揚スルニアリ、即チ茲ニ日本及ヒ中華民國ノ朝野諸縉紳ト胥謀リ、北京及ヒ東京ニ於テ毎年両国聯合絵画大展覧会ヲ開カントス、庶幾ハ両国藝術ノ握手ト交驩トハ両国民人ノ交誼ヲ促シ、以テ東洋ノ平和ニ貢獻スルコト甚タ大ナランコトヲ、冀クハ大方博愛ノ諸君子特ニコノ挙ニ対シテ深大ナル翼賛ヲ賜ハラシコトヲ、敬テ白ス」と結んでいる。日付は大正十年（一九二一）十月一日、発起人には正木直彦、小堀鞆音、川合玉堂、竹内栖鳳、山元春挙、小室翠雲、荒木十畝、幹事は荒木十畝、渡辺晨畝、賛助員には徳川頼倫、山川健次郎、渋沢栄一、犬養毅、滝精一、益田孝、長岡外史、大谷光瑞、森林太郎、黒板勝美など計二十二名の名が並んでいる。渡辺が日本出発前に用意して持って行ったものである。中文「中日絵画聯合展覧会小啓」に名を列ねる中国側発起人は呉昌碩、金城、周肇祥、顔世清、陶瑑、陳衡恪、湯滌、王一亭、名誉賛助会員は徐世昌、黎元洪、陳寶琛、朱益藩、林紓、周自齊、林長民、嚴智怡である。

出品は日本画六十九点、中国画百四十二点、欧美同学会の会場は手狭であったので八日間の会期中に数回展示替えを行い、入場者は数万人に達し、北京で発行する内外の新聞は、報道にいずれも多くの紙面を割いたと伝える。「展覧会記事」は「殊ニ此ノ盛況ヲ見ルニ至リシ奇ナル現象ハ、元來会場ニ用キラレタル欧美（同）学会カ、殆ント排日ノ策源地ノ如キ処ニシテ、今日マテ各所ニ起リシ幾多ノ排日の行動カ、多ク此処ニ於ケル醸生シタルニモ拘ハラス日華聯合展覧会ニ使用シ、殆ント反対ノ親善ヲ表示スルニ至リシコト

ナリ」と記している。

渡辺の「回顧」にも見えるが、出品作品の販賣は第一回展から行われ、第四回展大阪会場では賣価を付記した「出品目録」が配布された。第一回展では中国側の協力に報いるために、日本側出品については賣約の二割、渡辺の作品については五割、総計五百八十一元を北京（五二六元）、天津（五五元）の慈善事業に寄付した。

「展覧会記事」によると、第一回中日絵画聯合展覧会が開催できたのは在北京の陸軍中将坂西利八郎の尽力が大きかった。坂西は中華民國総統府顧問をつとめ、北京錫拉胡同に広大な「坂西公館」を開設して対中国情報・謀略活動に従事していた人物で、以後も絵画聯合展覧会と密接な関係を持っていたことから、渡辺晨畝、荒木十畝の意図とは別に、坂西と外務省は当初から聯合展覧会を中国美術界に対する宣伝・情報活動の一環と見なしていたと考えられる。

北京での展覧会が好評であったので、十二月二日から八日まで天津・河北公園商業会議所で第二次展を開催した。天津展では天津実業厅长嚴（智怡）氏（夫人は女子美術学校卒）が尽力し、観客は二万人に達した。天津の『大公報』は「絵画会出品日本画評」（民国十年十二月二日第二面）で日本画を南北合派、写生派、土佐派、光琳派、応挙派、浮世絵派、雅邦派、未来派、純南派に分けて短評した。なお、北京展では大總統徐世昌が勝田蕉琴「観音大士像」、山田真山「達磨大士像」、渡辺晨畝「葦塘月夕」の三点、靳總理が山田敬中「水墨山水」、岩崎湖堂「夏山」、服部春陽「江山独釣」、渡辺晨畝「竹林雪後」の四点、張（志潭）交通総長は三木文華「嵐山」、高瀬五畝「猿」、黎元洪は渡辺晨畝「不老長春」を買上げ、北京在住の西洋人も荒木十畝「蘆雁」ほか六点的の買約をした。天津展では嚴実業厅长が渡辺晨畝「池塘

飛鷺」、警察庁長楊以徳が荻生天泉「奈良朝仕女」外一点を買上げたほか、広瀬東畝「蘆雁」も買約になった。

一九二二年ごろの北京画壇は、国立北京美術学校（一九一八年開校）、北京大学画法研究所（一九一八年創設）のほかは、一九二〇年五月に徐世昌の援助を受けて金城、周肇祥、陳年、陳師曾などが設立した中国画学研究会を中心に清末以来の画家、文人が活動しているだけで、上海とちがって展覧会自体が少なかった。外国人画家といえば、一九二二年春から上海、漢口、天津を廻って、六月に北京・大和倶楽部で個展を開催した西田武雄のように、主要な日本人居留地を訪れて個展を開催する画家、あるいは取材旅行の途中で個展を開催する画家が稀にいたくらいである。多数の作品を集めた日本画展覧会など考えられない状況であった。日本人画家の北京での個展開催が増えてくるのは、この第一回中日絵画聯合展覧会以後のことである。渡辺が「回顧」で述べているように「有史以来未だ無かつた企てが実現され」たのである。それだけに渡辺、荒木の喜びは一入で、それが翌年の東京展開催に繋がった。

二、第二回日華絵画聯合展覧会

——一九二二年 東京

渡辺晨畝は先の「回顧」の中で次のように述べている。

先ず望外の成功に勇気を得まして、今後は一層の奮発努力をして此会を更に立派に仕上げやうと其時大決心を致しましたが、日支両側からは又意外の歓迎宴等も開いて頂いて、私は唯只感謝する外なく、日本に帰つて此景況を荒木氏に語つた所、氏も衷心から喜んで、翌十一年（一

九二二）の春東京に聯合会を開かうといふことになり、委員会合協議の上、支那の画家達を迎へることに決定しました。併し今迄は自費で致しましたが、段々大袈裟になつては容易でないから坂西中将からの紹介で和田豊治氏に後援を頼んだ所、氏は大に同情して日華実業協会に相談して同会から三千円寄附をして貰つたので、其れを土台に準備を整へて居ますと、四月二十日頃、金城、陳衡恪、呉熙曾の三代表画伯が日本へ出かけてきました。私は下関まで出迎へ、大阪有志の希望で一日同地下車、其れから東京へ直行、五月一日から十五日まで東京府の商工奨励会に日支絵画展覧の第二回を開きましたが、之も非常に盛会で、宮内省御用品を初め諸名士の買入れがあつて支那側の絵画だけで一万一千円の賣り高に達した……。

「大正十一年（一九二二）五月開催 日華聯合絵画展覧会報告」⁽³⁹⁾によると、

第二回日華絵画聯合展覧会開催の経過は次のようであつた。

一九二二年十一月から十二月にわたつて、北京、天津で渡辺晨畝が我が国から携へて行った東京の画家数十人の新作画を、現代中国画家の新作画と共に陳列して試験的に展覧会を開催したところ、予想外の好評を博して、中国側も正式に第二回日華聯合絵画展覧会開催の意向を伝えてきた。そこで渡辺は本年（一九二二）二月、その快報を持つて帰国し、發起人の川合玉堂、小堀鞆音、小室翠雲、荒木十畝の四人に知らせ、同時に展覧会開催と来日する中国画家の歓迎方法について相談した。在北京の陸軍中将坂西利八郎は東京での開催に大きな期待を寄せ、その成功のためには朝野の政治家、実業家の賛助を求めると、荒木・渡辺を本郷房太郎大将、長岡外史中将に紹介、荒木・渡辺はさらに渋沢栄一、和田豊治に面会して日華実業協会から三

千円の寄附を得た。

展覧会開催に適當な会場はいずれも平和記念東京博覧会に予約されていて、相応しい会場がなく、教育博物館、三越呉服店もすでに予約があった。

結局、国民新聞記者近藤重一の斡旋で東京府庁構内商工奨励館に決定した。

四月三日、本郷三丁目燕楽軒で「展覧会および中国画家歓迎会準備協議会」を開催、参加者は川合、小堀、小室、荒木の発起人四名のほか、池上秀畝、島田墨仙、勝田蕉琴、荻生天泉など四十数名、他に新聞雑誌記者十数名であった。協議会は、各自出品の勧誘をすること、東京を中心に画家二百余名に展覧会趣意書および出品勧誘状を発送することを決定し、その経過は渡辺から在北京の坂西中将、金城に伝えられた。

東京開催が決定すると、中国側画家も喜び、北京・上海の画家に対して出品の勧誘、訪日画家の人選が進められた。北京では金城、顔世清、周肇祥、陳衡恪、陶鑑泉、陳年、王雲などが訪日を希望、上海では王一亭、葉伯常が強く希望したが、折から奉直戦争が始まったため、訪日を取り止める画家が続出し、結局、金城、陳衡恪、呉熙曾の三人だけが来日することになった。三人は北京・上海の出品作品を整理して北京を出發、朝鮮經由四月二十一日朝下関に到着、下関からは出迎えた渡辺が同行した。大阪の歓迎会では知事、市長、画家、実業家など百数十名が出席、翌日一日市内見物をして二十四日朝東京に到着、神田駿河台の龍名館に入った。

中国代表団の到着を待つて「展覧会委員会第一回協議会」を京橋日吉町の日華で開催、次の事項を決議した。

一、会場 東京府商工奨励館三階

二、会期 五月一日は新聞記者および関係者下見、二日から公開、第一日は招待日、十五日閉会

三、歓迎会 五月三日 築地精養軒

四、展覧会出品受付および締切、鑑査要項

- ① 会員の出品は総て無鑑査とする。
- ② 会員以下の出品は幹事が鑑査を為し、その結果によって陳列する。
- ③ 出品受付は二十一日から始めているから、二十六日締切。三十日中に陳列を完了すること。

四月二十六日、一行三人は午前中、渡辺同道で両国の美術倶楽部に書道及画道社主催古書画展覧会を見、午後は小室の案内で平和博覧会美術館を見物、夜は小室の招待で帝劇、翌二十七日は東京美術学校を大村西崖の案内で参観、午後は渡辺が帝室博物館に案内、二十八日は午前、横浜に赴き、領事館その他を歴訪、午後帰京して小石川植物園を参観、夜は日本側発起人四人が築地田中家に招いた。三十日、日本側は川合、小堀、荒木、小室の四人が出品鑑別に当り、約二十点を落選とした。五月一日は午後三時から都下各新聞雑誌記者の下見会。中国側は四百四十五点、日本側出品は七十九点であった。

五月二日展覧会第一日目は招待日で、約四千通の招待状発送に対して来賓者七百四十人、陳列品の賣約は四十点、二千六百元に達した。精養軒での歓迎会には八十余名が来会、後藤朝太郎が会を代表して歓迎の辞を述べ、金城が謝辞を述べた。続いて川合玉堂が日華両国藝術家提携の必要を述べ、犬養毅が東洋藝術に対する所感を述べた。展覧会会期中はほぼ連日、一行を招いて日本側関係者主催の午餐会、晚餐会が開かれた。その間、六日には山本悌二郎邸で宋元古画を鑑賞、七日は東京美術学校留学中の中華民國学生主催の歓迎会に出席、午後はフランス美術展を観覧、八日には小室翠雲の箱根別業湯本長与山荘に遊び、十日は町田曲江個展会場を訪れ、十三日は川合玉堂邸、十四日は小堀軻音邸に招かれた。

十五日、展覧会が終了、入場者は合計七千五百五十六人、作品売上高は中国側作品が一万八百五十一円、日本側作品が一千四百四十円、合計一万二千二百九十一円であった。宮内省は金城「暖翠晴巒図」および陳衡恪「山茶図」の二点を買上げた。

十六日は交詢社主催晩餐会。十七日は正午に岩崎家清澄園別邸で招宴、十八日朝、小室、後藤朝太郎が同行して上野から日光に向かい、同地に一泊した。二十日正午、上野精養軒で日華聯合絵画展覧会主催の三氏送別会、同夜は金城が展覧会関係者十名を築地精養軒に招待、二十一日は大倉喜八郎招待の午餐会と続き、三人は二十三日午前九時過ぎ東京駅を出発した。途中、京都で下車、京都帝大総長荒木寅三郎、教授内藤湖南、竹内栖鳳、山元春挙その他名士の大歓迎会、実業家の歓迎会に出席、奈良の古跡、神戸を見て帰国した。

展覧会終了後、十二月に中国側出品から三十一名三十二点、日本側から六十一名六十五点を選んで『日華聯合絵画展覧会図録』（縦二十二・二センチ、横十五・四センチ）が出版された（挿図3）。編輯兼発行人は「日華聯合絵画展覧会 代表者荒木十畝」であった。

挿図 3
『第二回日華聯合絵画展覧会図録』 表紙
外務省外交史料館蔵

上海では、五月六日付『申報』（第十五面）が短く「五月一日から東京府庁商工奨励館で開催される中日聯合絵画展覧会に参加するため、金城、陳衡恪が南北画家の作品約四百件を携えて東渡した」と伝えた。

第二回日華聯合展覧会は、日本に現代中国絵画を紹介した最初の展覧会であった。齊白石が名を知られるようになったのは本展からであり、また、京劇俳優梅蘭芳の画業が紹介されたのも本展が最初であった。

三、第三回中日絵画聯合展覧会

——一九二四年 北京・上海

渡辺晨畝は第三回展について「回顧」の中で次のように述べている。

（大正）十二年（一九二三）になつて、秋北京で第三回の展覧会を開かうと準備中、突然東京の大震災で延期の已むなきに至つた所、本年になつては其震災の影響にも屈せず、美術家達は努力して一月から準備にかかり、四月来燕（北京）、今度の中央公園の開会となつたのであります。

荒木十畝・渡辺晨畝連署の「大正十三年（一九二四）春季開催 北京・上海日華聯合絵画展覧会報告書」⁽⁴²⁾によると、開催経緯は次のようであった。

日華（中日）絵画聯合展覧会は第一回、第二回と好評で、一九二三年秋季に北京で第三回を開催する旨、中国側発起人金城など関係者から連絡があった。今回は北京および上海で開催することとなり、前二回にまして盛んな大展覧会にしたいので、外務省亜細亜局および対支文化事務局に援助を求め、また、各方面からも多大の援助を得ることができ、準備に着手した。しかし、

同年九月一日の大震災のため、一時延期の已む無きに至った。絵画聯合展覽会に縁故のある中国の画家は、画会を開いて義捐金を集め、七千余円を外務省を経て寄贈した。また今春皇太子のご成婚に際し、金城、周肇祥、陶鑑泉、蕭愨の四人は慶賀の作品を贈ってきた。

一九二四年早々、中国側から絵画聯合展覽会を予定通り春に北京・上海で開催したい旨連絡があった。日本側は一月から準備を進め、三月初旬、東京本郷の燕楽軒で発起人委員会を開き、特に文化局の岡部（長景）、長岡外史の出席を乞うて、展覽会開催について協議し、続いて「趣意書」を発表して出品作品の募集をはじめた。三月、渡辺晨畝は京都に行き、発起人の竹内栖鳳、山元春挙と京都の画家を歴訪して出品を依頼して帰京した。渡辺がわざわざ西下したのは、この前年春、北京で秋に開催と聞いた内田康哉が竹内、山元宛に、中国側は「是非両京ノ名家ノ作品ノ出陳ヲ希望シ」ているので「御援助ノ程切望ニ不堪候」と四月二十六日付で書き送ったことを受けてのことと考えられる。

四月七日から四日間、本郷燕楽軒で出品を受け付け、その内二百数十点を選んだ。日本画家代表として東京から荒木十畝、小室翠雲、渡辺晨畝、荻生天泉、広瀬東畝、太田秋民、宮田司山、福田浩湖、佐藤華岳、森山香浦、永田春水、京都から玉舎春輝の十二名の渡華を決定した（『北京週報』百十号「京津日より・日本画家一行来京」には、玉舎春輝の代わりに久保田翠岳を載せる）。

一行は四月十六日朝、東京駅を出発。下関から釜山、奉天（現瀋陽）を経由して二十日午前北京に到着。中国側から金城、周肇祥、顔世清、關伯鈞、廖恩燾、劉驥業、馮閔模ら、日本側から芳沢謙吉公使、坂西利八郎をはじめ実業家など数十名の出迎えを受けた。一行は一旦宿舍の扶桑館に入り、午後四時、金らと展覽会場の中央公園に行き、第一会場の社稷殿および第二会場

董事会を見て廻った。二十二日、荒木、渡辺は平井博士、坂西中将、芳沢公使を訪問、また金城を訪問して打合わせを行った。二十三日、一同は会場で陳列作業に当った。なお、荒木、渡辺は挨拶のため外交総長顧維鈞、農商総長顔惠慶、教育総長張國淦、内務総長程克、教育次長羅鴻年、外交次長沈瑞麟、陳寶琛、顔世清、汪大燮、關冕鈞、高凌霄、展覽会会長周肇祥を歴訪した。この日、会場入口に日華両国の国旗を交叉掲揚した。

二十四日、展覽会開会。小室は一行より遅れてこの日北京に到着、中央公園で中国側画家有志による歓迎宴が開かれた。夜、小室、荒木、渡辺の三人は顔、金、關、廖など十一名の招宴に出席。二十五日、この日一日で入場者は数千人を数えた。一行は昼、陳寶琛主催の釣魚台離宮での歓迎宴に出席。夕刻、金城邸で中国側から顧維鈞、顔惠慶、胡惟德、湯中、王繼曾、屠振鵬、廖恩燾、周肇祥、日本側は一行のほか、芳沢公使、池田書記官ほかが参加して名刺交換会が行われた。渡辺から宣統帝溥儀に献上する自作「孔雀」が陳寶琛に渡された。二十六日、顔世清、金城主催の歓迎宴に出席。二十七日、周肇祥が玉泉山で歓迎宴を催した。二十八日、曹錕大總統が広瀬東畝、永田春水の作品二点を買上げた。夜は顔世清、李祖紳主催の歓迎宴。二十九日、古画収蔵家關伯鈞邸に招かれ、古画を鑑賞、饗宴を受けた。午後三時半から中央公園で日本留学生その他による招待宴。席上、屠振鵬が「日華両国民が提携して東洋美術の研究に努め、その精華を発揮することは、もつとも慶ぶべきことで、国境なき藝術による精神上の交際は、益々親密となるべく、これは同文同胞のもつとも幸福とするところである」と述べた。夜は中華匯業銀行総経理李光啓の招宴に出席。三十日、昼、一行は芳沢公使、坂西中将とともに廖恩燾の招宴に出席。午後二時から萬壽山内府（頤和園）での招宴、当日は一行のため、一般観覧を一時中止した。午後七時から孫潤宇の招宴、

宴席での日中画家による詩の唱和は『北京週報』第百一十一号「黄紫低昂」に留められている。

五月一日、一行および芳沢公使、坂西中将は張國淦、顔惠慶、高凌霄、顧維鈞など主催の伝心殿⁽⁴⁵⁾の招宴に出席し、宣統帝溥儀専属の料理人の手になる料理を味わった。宴酣のころ、中国大官の一人が渡辺に「貴国ト中国トノ藝術趣味ニ於ケル交際ハ益々打チ解ケテ親密トナレリ。誠ニ喜ブベキ所ニシテ、将来、東西両洋ノ人種問題ノ起ル時節必ず到来スベケレバ、斯カル場合ニハ、中国ト日本トハ同心協力シ以テ東洋ノ安全ヲ計ラザルベカラズ」と話した。宴後、宮中の秘宝を鑑賞し、続いて太和殿、武英殿、文華殿の宝物を鑑賞した。夜は方洛、張漢主催の招宴。二日は李祖年の招宴、宴後八大寺を廻り、碧雲寺を参観。夜、芳沢公使、坂西中将、牛島(吉郎)、南満鉄道北京公所参事)などと金城邸の歓迎宴に出席。

三日夕刻、展覧会は閉会。中国画側の出品は四百余点(出品目録によると四百十三点)。出品者は北京、天津、南京、上海、無錫、紹興、湖南、長沙、江西、安徽、福建、貴州、四川、その他、満州、蒙古に至るまでほとんど全国に及んだ。日本側は東京、京都、大阪、その他の地方からも出品があり、総数二百五十余点(出品目録では百五十六点)であった。この日、凌文淵ほか十九名の招待で一行は南口十三陵、八達嶺の観光に行き、南口で一泊、翌四日八達嶺に向かい、観光、写生をして夕刻北京に帰着、夜は梅蘭芳主催の招宴に出席。五日、展覧会の後片付け。日本出品画の賣約は一万円を超えた。正午、崇光寺で王亞南の招宴。夕七時、芳沢公使官邸の招宴。中国側関係者数十名が出席した。六日、宣統帝溥儀から渡辺晨畝に親筆「方駕徐黄」(まさに徐熙・黄筌を駕ぐ)が下賜され、陳寶琛が添書を添えた。正午、安藤(万吉)「新支那」社長の招宴。午後七時から小室、荒木、渡辺三名主催の慰勞

送別宴、中国側は陳寶琛、廖恩燾、金城、周肇祥、顔世清、關伯鈞、梅蘭芳その他数十名、日本側は芳沢公使、坂西中将はじめ数十人が出席した。夜十時から袁克文の招宴に出席。七日、渡辺晨畝主催で中国側関係者を石田に招待。八日、大總統府の園遊会に招かれ、大總統曹錕に謁見。午後七時から審計院長莊蘊寬主催の招宴に荒木、小室、渡辺が出席、また、三名はこの日中国側関係者を歴訪して謝辞を述べた。

九日午前、北京駅から上海に出発、金城は弟金紹堂、息金開藩および門人を伴って同行した。小室、久保田は天津で下車、帰国の途についた。一行は途中、南京、鎮江、焦山、金山、蘇州を遊覧して、十六日上海に到着、金城、王一亭、岡村(寧次)中佐などの出迎えを受け、豊陽館に投宿。旅装を解くとすぐに展覧会場の愛而近路(現、安慶路)紗業公所に行き、陳列作業を行った。夕刻、東亜酒樓で邱、金両氏の招宴。

十七日、上海の展覧会初日。日本側一行は矢田(七太郎)総領事、岡村(寧次)武官、王一亭、呉昌碩を歴訪。正午、精進料理功德院で王、呉、金三人の招宴。夕刻、金紹堂邸で招宴。十八日、杭州に行き、呂萬の出迎えを受け、西湖有美書画社に赴き、扁舟で西湖を一周。夜は同社に宿泊して、十九日に上海に帰った。

十九日、聯合展覧会は終了。出品は日本画百四十四件、中国画二百八十一件、刻竹六十六件であった。日本画の賣約は一千三百余円であった。二十日、王一亭を訪問。昼、矢田総領事の招宴。午後、呉昌碩を訪問。二十一日午前八時、上海丸に乗船、上海から帰国の途に就き、二十二日午前十一時、長崎着、二十五日十二時半、東京駅に到着した。

第三回中日絵画聯合展覧会は、北京では『盛京時報』が短く報道(民国十三年四月二十七日第二面)し、『北京週報』百十号(大正十三年四月二十七日)

は今関天彭「日支聯合画会を観る」、好丹青「日支の絵画共展」を掲載した。

上海では『申報』が一九二四年三月十七日(増補版第二面)に「上海・北京の中国画学研究会が四月下旬、日華聯合展覧会を開催する」と伝え、四月二十五日(第十五面)には「第三次中日絵画聯合展覧会は四月二十四日から三十日まで北京中央公園で開催と決定した。日本からは東京画壇を代表して小

室翠雲、荒木十畝、渡辺晨畝、京都画壇を代表して玉舎春輝、他に八人の參觀団が来華のためすでに東京を出発した」ことを報じた。五月七日(第七面)には「北京中日絵画聯合展覧会統聞」の見出しで、「中日絵画第三次聯合展覧会は四月二十四日に開会した。出品は日本から約二百余件、中国は南北の

画家の約五百件を二大陳列室に展示した。竹刻工藝は近年あまり喜ばれず、竹刻に優れるものは、暁の星のように少ない。金氏兄弟は、この技が減びることを恐れ、竹刻を盛んにしようと努力している。そこで展覧会に合わせて

優れた作品を集めて陳列した。精品揃いで、多くの人から称賛されたが、残念なことに非賣である。開会二日ですでに観客は多く、作品の賣れ行きもよい。渡辺晨畝の『孔雀』は一千元で關伯鈞が購入し、荒木十畝の『雨後』は

八百円で金城が買った。永田春水の『幼鷄』、広瀬東畝の『鯉魚』は総統府が購入した。三十日閉会の予定であったが、各方面から延長を望む声が多く、五月三日まで延長された。中日双方の作品の半数が賣約となり、金額は一万

元以上となった。購入者では曹錕、徐世昌のほか、馬福祥、顔世清、關伯鈞、高凌霄、顔惠慶、金城、楊臨齋、李組紳、吳靜盦などの購入が多かった。日

本人一行は七日頃北京を出発、泰山などを遊覧して上海に向かう」と伝えた。その後も予告記事、広告を掲載、十六日(増補版第二面)の「藝苑清音」欄

は「北京の中日絵画展覧会はずでに終り、入場者は大変多く、出品は中国側が約百余人の作品五百余点、日本側が約百余人、二百余点、すでに賣れた作

品は日本画が約六十点約六千元、中国画は約九十五点約四千元である。今回上海展では賣れた作品は新作品で補充する予定」であると伝えた。

『申報』五月二十五日(第十七面)には二編の展覧会評が掲載された。王警濤の「參觀中日絵画展覧会記」は、次のような内容であった。

日本の出品は約二百余件、中国側が約五百余件、国粹画が大部分で、木炭画、鋼筆画、油画などは一点もなかった。中日両国の画家が国粹画を尊重していることがよく分かる。並べ方は甚だ不合理で、画題によって分けるのではなく、画家単位で展示するのでもなく、秩序無く掛けられている。室内の光線はかなり良い。中国画家は筆力を重んじる方向に傾き、日本画家は繊細巧緻な点に優れている。定価は大変高く、一点三千元の作品もある。例えば顧鶴逸の長幅山水は筆致甚だ工細で、構図、設色ともに非凡、価格は三千元である。陳列の中では吳(昌碩)派が最も多い。吳昌碩個人の作品も少なくないが、吳昌碩の筆致を倣ったものが多い。題字もまた吳昌碩の書風に倣ったものが多い。このことから吳派の勢力の大きさを知ることができる。吳昌碩の作品では「老年」、

「紫藤」、「山水立軸」が最も良い。「山水立軸」は梅道人の筆法に擬したもので、淡々とした数筆で、力は十分備わっている。金城の山水・花卉は天下に有名であるが、今回もたくさん陳列されている。長幅の花卉山水が最も良く、定価は一千元である。金城・金陶陶合作の「錦鷄」「桃花魚石」などは第一の国粹画といふべきもの。顧世清「載鶴探梅」は背景が甚だ良い。しかし、舟が小さくて人が大きく、鶴がまた人よりも大きく、実際と合わない。国粹画の中で独創的といふべきであろう。

日本画家では、倉石松畝、太田天洋の作品が多い。太田の作品はおお

むね輪郭がはっきりしていて謹厳で、線と形を重んじて色彩を軽く見ている。純粹な擬古派の画家のようである。「盧生の夢」は代表作と云うべきで、設色鮮明、筆致工細、中国古代の画風を持っている。本清一の「越戸景趣」は全体を筆の穂先で描いたもので、静かな色彩で愛すべき作である。伊藤響浦の「比良の暮雲」は暮色朦朧、松林がかすかに遠くに見え、絶妙な夕暮れの田園風景である。戸室臨泉「雪の山里」はたくみに山の凹凸を表現していて、また色彩も実に自然である。森山香浦「山鳩」は羽毛が艶麗で見事である。ただ鳩の姿勢がぎこちない。上野秀薫「花菖蒲」は花、葉ともに全面を白く塗っている。葉が俯いたり真つ直ぐ伸びたりしている様子や色彩の配合はまったく真に迫っている。佐藤華岳の作品はかなり数多いが、「池畔」が最もよい。荷葉を淡墨で描き、まばらであるのは趣がある。構図も先人をまねていない。荻生天泉「礼賛」は純粹の古法画である。設色は鮮明で、筆致は精細。これは古代の礼法の繁瑣で無意味なことを描いたものである。荒木十畝「万年報喜」は極めてよい。定価五百元である。一本の曲がった松を描き、樹上に七羽の鵲が止まっている。しかし、何を寓意しているか知らない。宮田絹子「夢」は、昼寝をしている一人の子供を描き、傍に玩具を置いてある。個性は極めて濃いが、設色は甚だ劣る。荒木十畝「雨後」は定価八百元。一羽の雉鶏と牡丹を描いたもので、鮮艶工細、優れていて、真に似ている。倉田松濤「楽天地」は一人の漁翁が笠を枕に臥している図で、笑顔は趣がある。一匹の犬が顔の上に伏せているがまるで接吻しているようである。この種の作品は理想とするところ極めて深く、倉田はあるいは陶淵明の仲間か自然主義者であろう。吉田寛「昼飯」は一人の児童が昼飯を食べている状況を描いたもので、表情が真に迫って

る。吉田の忌憚のない写実的な精神力が、画面に生き生きと現れたものである。日本画家の中に月岡耕漁という画家がいて「震後街」を描いている。日本の地震の後の状況を描いたもので、家の戸はぴつたりと閉ざされ、道に焔炉が置かれ、道行く人はまばら、憂わしい状況である。設色、構図ともに優れている。このような写実的な作品ははなはだ人を感じさせるが、七、八百点の作品から成る中日絵画展覧会の中で、この作品一点だけである。

松廬「中日絵画展覧会參觀記」は、会場の第一室から第五室まで室ごとに評を述べたもので、評語は比較的短く、大体数字である。その中で日本画に対する評の主なものは次の通りである。「月岡耕漁『震後街』は、地震後の街を描いたもので、観者はその場にいるようである。倉田松波『飛行機』は藝術手腕を以って物質文明の利器を描いたものである。岩田豊麿『紫式部』は一人の女性の眠れる姿を描いたもので、頗るよく描いている。佐藤華岳『夕顔』は夕顔を描いたもので、着色がすばらしい。宮田絹子『夢』は一人の子供の眠っている姿を描いて、行き届いた表現である。梅沢秋穂『湖畔』は幽雅極まりない。その他さまざまで見事である」。

中国人から見た日本画に対する批評の早い例である。また王警濤の評は、晩年の呉昌碩の影響の大きさを具体的に伝えている点でも興味深い。

この第三回展では北京出品については冊子『中日絵画聯合第三次展覧会目録』（挿図4）が、上海出品については一枚刷りの『中日絵画第三次聯合展覧会出品目録』が出版された。なお、本展には、外務省から「若干」の補助金が交付された。

四、第四回日華絵画聯合展覧会

— 一九二六年 東京・大阪

前三回の絵画聯合展覧会が両国においてそれぞれ相当な成果を挙げたこと、特に北京での第三回中日絵画聯合展覧会では日本側関係者が大總統曹錕をはじめ中国の要人、名士から連日国賓のようなもてなしを受け、また、展覧会自体も好評であったことから、渡辺晨畝、荒木十畝などは日華美術交流をさらに拡大、充実させたいと考えたようである。

渡辺は一九二五年五月、日華絵画聯合展覧会を同年秋、東京・大阪の二都で開催する案、および北京に東洋美術研究室を設置して歴史美術品の蒐集・研究を行う「展覧会拡充案」を持って渡華した。渡辺晨畝が外務省に提出した「大正十四年（一九二五）六月 日華美術聯合研究問題交渉報告書」⁴⁶によると、渡辺は東洋美術研究室の開設に力を入れていて、展覧会について交渉することは少なかったようである。その時の交渉内容および経過は次の通りである。

一九二四年に北京・上海で開催した絵画聯合展覧会は未曾有の好成績を収

挿図 4
『中日絵画聯合第三次展覧会目録』 表紙
外務省外交史料館蔵

め、渡華した画家に対する待遇は国賓に対するようであった。今年は日本において開催する順番であるが、昨年の中国における待遇に対するには国威を辱めないよう準備する必要がある。この事業は国際関係のことであるから、政府の後援がなければ将来の継続は困難である。それでその経過を外務次官、文化事業部長へ請願したところ、二人は日華の画家が聯合して東洋美術の向上に努力しているのを認められ、補助金下付を許可された。そこで発起人川合玉堂、横山大観、小堀軻音、荒木十畝、小室翠雲、竹内栖鳳、山元春挙、下村観山と相談し、展覧会問題について中国側と交渉するため渡辺が北京に出発することになった。

渡辺は五月十日東京を出発、下関から釜山、奉天を経由して十五日到北京到着。十六日芳沢公使を訪問、今回来京の目的は本年日本で開催する聯合展覧会の打合わせと外務省文化部の補助金分配のためであることを説明し、芳沢の協力を要請し承諾を得た。芳沢は、文化事業には中国の一部に反対する者がいるから文化と言わず、単に日本政府から補助があると言う方がよい、と注意した。十七日に汪榮寶を訪問し、日華聯合美術展拡充問題について尽力を要請し快諾を得た。さらに顔世清、周肇祥を個別に訪問、拡充問題で協議した。十八、十九日も周肇祥、關冕鈞、王賢祥と話し、外交総長沈瑞麟には日本政府から補助金が交付される旨を伝え、協力を要請し快諾を得た。二十一日は公使館の日露交渉成立祝賀宴に出席、金城とともに席面をかいて館員全員に贈った。二十二日午後七時から金城邸の招宴、沈総長、顔惠慶、林長民、江庸、汪榮寶、姚震、顔世清、周肇祥、陳漢第、張元節、趙時桐、王頌賢、坂西利八郎、公使代理などが出席した。二十三日は午後七時から公使館の招宴、中国側の出席は沈総長、林長民、陸宗輿、胡惟德、汪榮寶、張元節、顔世清、金城、周肇祥、王頌賢、顔惠慶、曹汝霖代理趙時桐などであ

った。二十四日は段祺瑞執政を訪問、日華聯合美術展拡充問題について援助を要請した。午後七時から沈外交総長邸の招宴に出席、日本人は渡辺ひとりであった。日華聯合美術展拡充問題について沈総長は「之ハ大事業ナレハ文化事業ノ内ニ加ヘ堂々發達セシムル方宜敷カラントノ内談アリ、晨畝ハ目的貫徹ノ時期至レリト内心大ニ歡喜」した。二十五日朝、芳沢を訪ね、前夜の宴会について報告。その後、姚震、朱深、周啓濂、朱益藩、貢桑諾爾布を訪問して協力を要請。二十六日は金、周、顔、王らが来訪して、日華聯合美術展拡充方法について協議を重ねた。中国側会長に徐世昌を推薦する話が出た。その後も六月四日まで連日、中国側要人、関係者を訪問して拡充問題について協力を要請、依頼した。その中には上記以外に錢稻孫、湯中、嚴智怡、雷殷、鄧萃英、馮閔模、王繼曾、陳寶琛、凌文淵、王正廷、熊希齡、莊蘊寬、陳年、梅蘭芳などの名が見える。この間、渡辺は連日、中国側関係者による招宴に出席した。六月二日、沈外交総長を訪ね、日本の外務大臣宛に日華聯合美術展拡充問題について書状を出してほしいと依頼したところ、書状では差し支えがあるかも知れないから汪榮寶が駐日公使就任のとき委細を含めて行かせるとの口約束を得た。六日から張家口、大同、雲岡を見物、十日夜、北京に戻り、十五日夜、北京を發つて奉天經由帰国の途に就いた。

『北京週報』百六十三号（大正十四年六月七日）は「京津便り・東洋美術研究室」に、渡辺晨畝画伯が日華美術研究提携のため、中国側各方面を奔走中であつたことは既報の通りであるが、いよいよ段祺瑞執政、黎元洪などの賛同を経て近く北京に東洋美術研究室を設置することになった、として、その内容と日中兩國の賛同者の名を伝えた。また、十一月三日付『都新聞』は、日中の美術家たちの提携は着々と進んで、来年は東京で第四回日華聯合展覽會が開催される。また、北京に開設する筈の日華美術研究所の計画も具体的

になつてきた。これは日本側で正木直彦など十二人が外務省に建議し、賛成を得たものである。中国側で非常な好感を以つて迎えられる、先月二十五日周肇祥など十三名が連署して段執政に対し、日本政府はすでに賛同しているというから中国政府も出来る限り協力して完備した研究所を建設することを希望し、段執政も賛同した、と伝えた。

この「東洋美術研究室」は、「日華絵画聯合展覽會籌備拡充弁法意見書」⁽⁴⁷⁾によると次のような組織、規模を持つものであつた。

- 一、東京、北京に常設事務所を置く。
- 二、毎隔年日本東京・大阪、中国北京・上海で交互に展覽會を開催する。
- 三、東亜絵画研究室を設置し、次のものを備える。

- (1) 東亜歴代美術史
- (2) 歴代名画の真本あるいは模本の写真
- (3) 古代彫塑圖像及び壁画の原物あるいは模本、写真
- (4) 古代の織物、刺繡、陶磁、金玉器及び出土品の絵画に関するもの、あるいは模本、写真
- (5) 歴代輿服器物
- (6) 動植物の標本、動植物の性情および飼育栽培方法で美術史研究者に役立つもの
- (7) 歴代のさまざまな营造物方式図様
- (8) 山川古跡名勝風景の写真
- (9) 東亜その他各国の図画
- (10) 歴代法書及び題画論書名書籍
- (11) 作画の器具、顔料、印章・印色、表装、收藏などの方法
- (12) 近代の工芸家、美術家、教育家の作品で参考にすべきもの

(13) 西洋の画学書及び科学書のうち、画学に関係ある図書雑誌

右の各項の物を出来るだけ購入し、また随時採し、以って画家の研究及び資料に充てる。

四、若干の訓練と準備を経て、適当な機会があれば両国の画家は力を合わせて欧州、米国において東亜絵画展覧会を開催し、東亜文化の栄光を發揚し普及を期す。

「意見書」には正木直彦、横山大観、竹内栖鳳、下村観山、小堀鞆音、結城素明、小室翠雲、川合玉堂、渡辺晨畝、顔世清、周肇祥、金城、王一亭の十三名が連署した。

なお、あとで見る渡辺の「第四回日華聯合絵画展覧会渡支交渉報告書」および「都新聞」によると、中国政府に提出された「拡充案」には顔惠慶、貢桑諾爾布、趙爾孫、沈瑞麟、林長民、章士釗、王繼曾、嚴智怡、顔世清、王一亭、陳漢第、周肇祥、金城が連署した。

大きな構想であったが、第四回日華聯合絵画展終了後、間もなく生じた中国側関係者間の内訂のため、展覧会事業そのものに支障が生じる状況になり、この東洋美術研究室構想は自然消滅したようである。その後の経過を伝える資料は見当たらない。

第四回日華絵画聯合展覧会は、本来一九二五年に日本で開催する予定であった。外務省は大正十三年十二月二十二日付で同展に対して「経費ノ一部トシテ約一萬円ヲ対支文化事業特別会計ヨリ」支出することを決裁し、また、「此種展覧会ニ対スル最モ有効ナル奨励方法ハ政府筋ヨリノ出品物買上ニシテ、現ニ客年支那ニ於テ開催ノ第三回展覧会ニ於テハ大統領ヨリ出品日本画ノ買上」げがあったことを考慮して、今回も一般会計から五千円の範囲で官邸あるいは在外公館用品として買上げることが大正十四年四月二十七日付で

決裁した⁽⁴⁹⁾。しかし、すでに触れたように渡辺は一九二五年五月の渡華では、東洋美術研究室開設に熱心になりすぎたためか、あるいは五月上海に始まった排外運動の影響から開催を危ぶんだためか、展覧会については交渉した様子が見られない。一九二六年一月十五日、渡辺晨畝は日本での開催を促す金城からの書簡を持って正木直彦を訪問、日華絵画聯合展覧会の会期を決定したいと相談した⁽⁵⁰⁾。第四回展の具体的な準備は、その時から始まった。

渡辺晨畝が一九二六年六月、外務省に提出した「第四回日華聯合絵画展覧会ヲ日本ニ開催ニ付 渡支交渉報告書」⁽⁵¹⁾によると、経過は次のようであった。一九二六年二月二十八日、渡辺からの申出を受けて外務省文化事業部長岡部長景は華族会館に發起人正木直彦、川合玉堂、小堀鞆音、横山大観、下村観山、荒木十畝、小室翠雲、結城素明、渡辺晨畝、京都から竹内栖鳳、山元春挙を招いて協議会を開催、中国側との交渉のため渡辺が渡華することになった。外務省亜細亞局は渡辺に対して「講演視察」の予算費目から千五百円を支出した。

渡辺は四月二十八日朝、東京駅を出発、下関から釜山を経て五月一日奉天に到着、そこからは軍事輸送で混乱する鉄路を避けて大連に下り、大連から海路を取って六日天津に上陸した。天津では七日劉驥業が同行して郭曾忻、郭則澐を訪問、東洋美術研究室および絵画聯合展覧会に関する「意見書」を渡し、協力を依頼。午後は宣統帝に拝謁。また、陳寶琛を訪問して尽力を乞うた。八日午前再び陳寶琛を訪問、その後、劉驥業、郭則澐が同行して徐世昌を訪問し、東洋美術研究室および絵画聯合展覧会について尽力と会長就任を要請し承諾を得た。また、段祺瑞を訪ね協力と出品を要請し承諾を得た。正午、黎元洪邸の招宴に出席。午後四時発の列車で劉が同行して北京に向かったが、軍事輸送優先のため深夜十二時に到着、扶桑館に入った。九日は坂

西中将、金城、顔世清、馮閔模、關冕鈞を歴訪して尽力を要請した。十日、芳沢公使を訪問、協力を要請し、また中国側の準備状況を説明した。その後、湯中、王繼曾、王金章を訪問、ついで金城、周肇祥を同行して坂西中将を訪問、東洋美術研究室および展覧会について協議した。十一日、湯中、齊白石が来訪、莊恩寛、嚴智怡、沈恆を歴訪して東洋美術研究室への協力と出品を依頼した。夕刻（北京）駐屯軍隊長（「小」脱カ）林と一緒に關冕鈞の招宴に出席。十二日朝、齊白石が来訪。その後、胡惟徳、江庸、沈瑞麟、顔惠慶、貢桑諾爾布、趙爾巽、梅蘭芳を歴訪して美術研究室に尽力を要請、正午、齊白石の招宴に出席。帰宿すると王繼曾、貢桑諾爾布、金城、惠均、王衡桂、李上達などが来訪。六時半から顔世清邸の招宴、出席者は關冕鈞、周肇祥、金城、凌瑞棠、坂西中将、本庄（繁）少将、小林（角太郎陸軍中佐、北京駐屯軍）隊長、大迫通訳官、江藤などであった。十三日は渡辺哲信『順天時報』社長、大村三井支店長、土屋（禎二審計院顧問）、市吉三菱（公司北京）支店長を訪問、協力を要請。六時半から金城邸の招宴、出席者は前夜とほぼ同じであった。宴後、美術研究室問題について要談をした。その後も連日、中国側要人、画家を訪問し、東洋美術研究室と出品について協力を要請し、また、王繼曾、王頌賢、嚴智怡、蕭俊賢などの招宴に出席した。

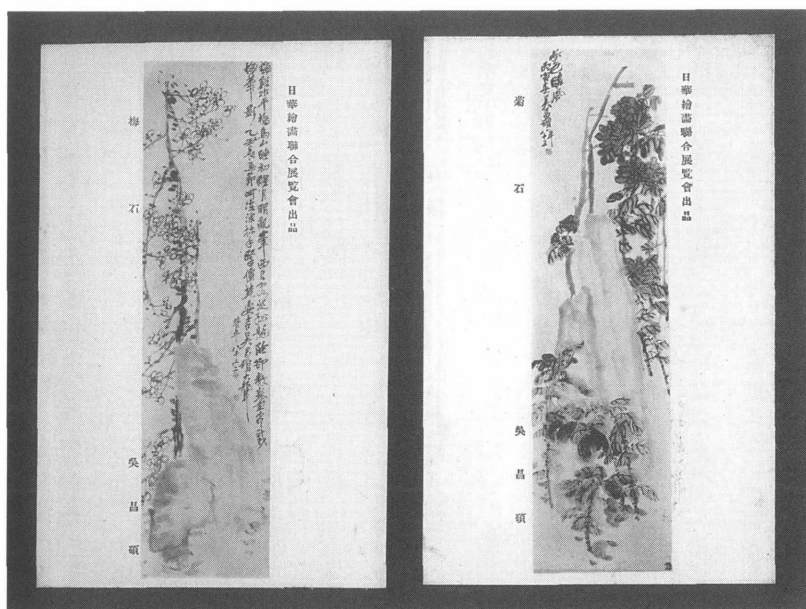
十七日朝、坂西中将邸を訪問し、同邸に届けられた中国側出品作品十数点を見、午後は金城邸で中国出品画を見、その後、胡惟徳、趙爾巽、莊恩寛、朱益藩、鄭孝胥、寶熙、溥侗に面会して美術研究室と出品に協力を要請し承諾を得た。六時から梅蘭芳邸の招宴、八時から公使館で内田康哉伯爵歓迎の茶話会、夜十時半から土屋顧問の長春亭の招宴に出席。十八日は正午から東興楼で趙世駿の招宴、六時から中央公園来今雨軒で陳年、蕭瑟、江采主催の招宴に出席、日本側は重光葵書記官夫妻、坂西中将、岩村、橋川が出席した。

十九日、蔡障川、朱益藩、趙爾巽、周肇祥、梅蘭芳から出品書画が届けられた。夜は芳沢公使主催の中国画家招待宴、二十日、顔惠慶総理はじめ要人、画家を歴訪して離京の挨拶をした。昼は満鉄主催の招宴に出席、その後、金城と一緒に坂西中将を訪問、展覧会について要談。七時から顔総理主催の招宴。日本側は公使館のほぼ全員と在京有力者数十名、中国側は元老名士百余名が出席した。

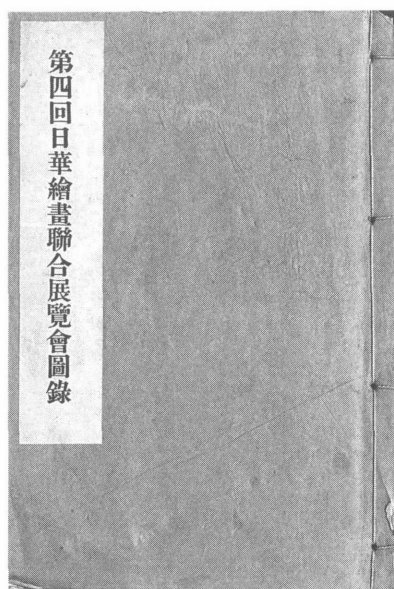
二十一日朝、北京を出発、天津で黎元洪、徐世昌の出品書画を受取り、奉天、釜山を経て二十五日夕刻、下関着。二十六日大阪に下車。外務省清水書記官と府知事、市長を訪ねて絵画聯合展覧会大阪開催について会場、歓迎方法の希望を伝え、会場を中之島中央公会堂と決め、渡辺は二十八日朝、東京に帰着した。

日華絵画聯合展覧会は一九一九年三月に荒木、渡辺などが「趣旨書」を発表して以来、発起人と幹事委員で運営されてきた。しかし、展覧会を中国では北京・上海、日本では東京・大阪の各一カ所での開催とし、さらに北京に東洋美術研究室を開設するなど拡充案が出てくると、経費の上からも実務の上でも発起人である画家たちの力では実行困難となった。荒木、渡辺は二人の力を超えることを知り、また、外務省は日華聯合美術事業を外務省の影響の下に置くことを考えたようである。一九二六年二月二十六日、岡部長景、渡辺晨畝は正木直彦を訪ね、日本側の取りまとめを依頼した。その経過については「はじめに」の東方絵画協会の項で触れた。

第四回日華絵画聯合展覧会は、中国側は徐世昌を中日聯合美術研究会総裁として、日本側は牧野伸顕伯爵を日華絵画聯合展覧会会長として進められた。展覧会の主催者を「日華絵画聯合展覧会」としたのは、準備段階では東方絵画協会が発足していなかったためである。



挿図 6 『第四回日華繪畫聯合展覽會繪葉書帖』から 東京文化財研究所蔵



挿図 5 『第四回日華繪畫聯合展覽會圖録』表紙 東京文化財研究所蔵

六月八日、北京から金城、惠均、李上達、王小山、上海から呉仲熊、徐安、周湘雲、王季眉が到着、十二日には周肇祥、金開藩、袁琴南が到着して中国側全員が揃った。

第四回日華繪畫聯合展覽會は六月十八日から三十日まで上野公園の東京府美術館で、七月七日から十一日まで大阪・中之島中央公会堂で開催された。各会場で配布された一枚物の「日華繪畫聯合展覽會出品目録」によると、東京会場の中国側出品は書三十三点、絵画三百四十三点、合計三百七十六点、日本側出品は日本画九十点、大阪会場の中国側出品は書三十二点、絵画三百四十一點、合計三百七十三点、ほかに参考品として「石濤山水冊」および「藍瑛画卷」が出品され、日本側出品は日本画四十五点であった。展覽會終了後十二月に、中国側作品九十六点、日本側作品八点、合計百四点を掲載した『第四回日華繪畫聯合展覽會圖録』が東方繪畫協會から出版された(挿図5・6)。なお、外務省は展覽會助成金として一万三千五百円を交付した。

第四回展の日中双方の賣上高は不明であるが、中国側出品の賣上げ残金四千七百三十四圓四錢が一九二六年十二月十八日、小切手で周肇祥立会いのもと金開藩に駐上海総領事重光葵から手渡された。

中国側の一行は東京で岩崎男爵邸(六月十四日)、山本悌二郎邸(二十日)を訪問、中国書画を鑑賞した。大阪では阿部房次郎邸、村山龍平邸、本山彦一郎、住友男爵邸を訪問して中国書画、青銅器などを鑑賞した。

『申報』は五月十二日(第十七面)に「中日書画聯合展覽會」が六月上旬東京で開催されることを伝えたのを最初に、二十日(第十七面)、二十一日(第十七面)、二十九日(増補第一面)にも報道し、六月三日(増補第一面)には展覽會参加のため呉仲熊が東渡すること、同四日(増補第五面)には金城などが「新古各派の作品五百点を携えて日本郵船上海丸で日本に向かった」

ことを伝えた。展覽会場を訪れた黄韶普は「參觀日本東京中国美術展覽會」(七月八日増補第一面)で、会場第一室から第十二室までの中国側の代表作を列挙し、次に第十三室から第十七室までの五室が日本画九十幅の展示に充てられていることを述べたのち、次のような感想を記している。

着色画では渡辺晨畝の孔雀と雛の図や山田耕雲の七面鳥は設色がとてもよく、生きているようである。ただ山水風景画は我国の作者に一籌を輸するようである。この展覽会は営業の性質を兼ねたもので、価格は四、五十元から千数百元にわたり、しかも購入者が頗る多い。日本は近年藝術を提唱して、写真、彫刻、絵画など展覽会のない日はない。あるいは政府、地方官庁が主催し、あるいは新聞社、百貨店が主催するなどさまざまである。出品点数も一、二百点のものから数十点のものまでいろいろで、大体は価格が付いていて、優れたものは数千元もする。入場無料である。鑑賞家は重価を惜しまず購入している。このような方法は一面では国民の美術愛好の精神を高め、一面では藝術家をして楽しませる。我国も日本に倣って大都市で展覽会を開催すれば、我国の美術界も必ず一歩進むであろう。

第四回日華絵画聯合展覽会は、順調に進められ開催されたようにみえるが、『北京週報』二〇九号所載⁽⁵²⁾「一記者」の「日支絵画展覽会の前途」は、聯合展覽会に問題が兆していることを仄めかしている。記事は、北京来訪中の渡辺晨畝の展覽会についての談話に続けて、おおよそ次のように記している。

日華の絵画共同展覽会を開いて、東洋藝術發展の一刺激にしたらとい

ういう考えは、民国七年(一九一八)記者達が中国の記者諸氏を日本に案内したときに始めて出た話である。その時は具体化しなかったが、その後、渡辺晨畝氏が北京に来て中国側と折衝して実現した。氏の努力に記者は感謝を表している。凡て日中共同とする事業は虚心坦懐に一切の私心を離れて、日中両国民の真の希望に一致するよう誠意を大きくすることである。最初は見向きもしないで、物になると出てきて他人の功を横取りする卑劣漢のいることは、どんな事業も同じであるから、警戒しなければならぬ。同時に、自分達の創めた事業であるからといって閉鎖的にならず、他の同志、斯界の真の有力者を歓迎するようでないといけない。……記者は日華絵画展覽会にそのような事があるかどうかは知らない。しかし、前年中国側で、別な一派が別な場所に同時に展覽会を開催し、別の歓迎会を日本画家にしたことを知⁽⁵³⁾っている。会の小さい間はそのようなことも少ないが、大きくなる程こういう傾向は大きくなる。絵画展覽会が外務省文化事業の援助を受け、益々規模を大きくしようとするについては、この辺の覚悟が最も緊要である。

五、中日現代絵画展覽会(第五回中日絵画聯合展覽会)

——一九二九年 上海・大連・奉天

東方絵画協會中国側代表のひとり金城は、第四回絵画聯合展覽会を終えて日本から北京へ帰る途上、一九二六年九月六日上海で急逝した。日本政府は日華親善の功績を称えて勲三等瑞宝章を贈り、東方絵画協會は牧野伸顕、内田康哉、犬養毅、細川護立、渋沢栄一、頭山滿、正木直彦、横山大観、竹内栖鳳、川合玉堂、荒木十畝、渡辺晨畝らを發起人に十月十七日、東京美術学校講堂で追悼会を行った。大阪では朝日新聞村山龍平、毎日新聞本山彦一、

知事川望、市長関一、画家から菅楯彦、矢野橋村、北野恒富、阿南竹陀らが発起人となって十月十三日、四天王寺本坊で追悼会を催した。

先にも触れたが、金城の没後間もなく、子息金開藩と中国側代表の周肇祥の間に軋轢が生じた。芳沢公使は昭和二年（一九二七）九月二十八日付公電で外務大臣田中義一へ要旨次のような報告を送った。⁽⁵⁴⁾

金開藩は今春以来、父の門弟一同と計り亡父の遺業を継承するため絵画研究会「湖社」⁽⁵⁵⁾を組織した。最初の事業として来る十月二十三日、北京中央公園で第一回展覧会を開催すべく各方面に出品を勧誘しているが、周肇祥を首領とする中華絵画研究会はこれに極力反対を表明し、各方面に湖社の存立を危うくするような輿論喚起に努めている。この事は明年秋当地で開催予定の東方絵画展覧会に影響するところ少なくないため、渡辺晨畝から当館（在北京日本公使館）重光書記官へ周・金に伝言の依頼があったのを機会に、館員を二人に会見させたところ、双方の言分は次の通りであった。

金——湖社は亡父の門下生一同によって組織されたもので、目的は亡父の遺志の継承である。これに反対を表明している中華絵画研究会員はほとんど湖社の会員で、みな賛成している。反対しているのは周肇祥一人だけで、それは湖社の成立を妨害しこれを破壊して、自分が絵画界を一手に収めようとする政治的野心からであることは識者はみな知っている。我々は予定通り十月二十三日に湖社第一回展覧会を開催する予定で、日本には渡辺晨畝外二三の大家に出品を依頼している。

周——民国七年東方絵画展覧会成立に際し、金城と自分の間には第三者を加入させないという条件があった。同会の発展は二人の努力の賜物で

ある。金開藩は元来遊蕩児で画をかけないことは勿論、自分の名前さえ辛うじて書ける程度で、亡父とは雲泥の差がある。彼は周囲の悪友に利用されているもので、自分は故金氏との三十年来の親交から、この暴挙を中止し父紹城の遺業を継いで画道に親しむようじつくりと話し、一時は了解したが、近來またまた動きだしたのは遺憾である。故金氏の遺志に副わなだけでなく、社会一般を欺き、引いては国際的にも影響が少なくない。日本側も注意されたい。

ということで、両者の不和は日に日に激しくなり、金は丁士源、顔世清を説得し、周は坂西利八郎を味方に付けようとしている。両者の言分を判断する材料はなく、当分和解は容易でないと思われる。

一九二七年十一月、正木直彦は渡辺晨畝と金・周間の調停を図る目的で北京を訪れ、関係者と懇談を重ねたが不調に終わった。⁽⁵⁷⁾ 渡辺は、従来の幹事以外に北京・天津では貢桑諾爾布、楊葆益、方若、劉驥業、丁士源を、上海では姚景瀛、龐元濟、徐安、王一亭などを幹事に選任し、外に陳寶琛、吳昌碩を名誉会長とする案を出し、一時は関係者の了解を取り付けたが、⁽⁵⁸⁾ 金一派の反対に会い取り消した。⁽⁵⁹⁾

周肇祥は一九二八年三月三十日、「東方絵画協会中国方面簽字代表周肇祥」の名で、千三百六十字の要旨次のような声明文を発表した。

中日両国の絵画聯合展覧会はすでに四回を数え、一昨年、日本が美術協会の改組を提案してきたので、私と金城君は代表として日本に赴き、東方絵画協会への改組を協議し、簡章八条を定め両国代表が署名した。帰国後、不幸にして金城君は亡くなったが、私は怠らず同志を集め、そ

の年十二月、北京本部を成立させ、正副会長、幹事を決め、王震君に依頼して上海支部を組織し、そのことを東京本部に文書で通知した。本会は常設機関であるから経費を必要とする。簡章第八条には経費の支給について、共同で得た収入は中日で折半すると定めてある。昨年の収入はそれぞれ日金五千円である。日本側幹事渡辺晨畝君は度々書簡で近いうちに送金すると言ってきた。昨年十月、渡辺君たちは北京に来たが、まだ送金されなかった。我々が催促すると渡辺君は予算書と受領証を要求し、それを東京に転送して同人が北京を発つ前に必ず渡すといったが、去つてもまだ経費は届かなかつた。本年（一九二八）一月、北京本部は東京本部に書簡を送り強く催促したが、未だ回答がない。多方面の調査によつて、金城君の子金某らが中国画学研究会に相談無く、経費の一部を受け取っていることを知り大いに驚いた。思うに東方絵画協会は国際文化事業であり、北京本部は全国画家の公共団体であり、一人一姓の私物ではない。金某は画家ではなく、また会員でもない。たとえ中国画学研究会に諮らずに別の事業をしようが、東方絵画協会とは無関係である。渡辺君らはかつて調停を図つたが、金某らは益々望みを大きくし、ついに湖社の名で無理な要求をなし、両国幹事の議決を覆し本会の計画を割こうとした。……この後、金某のものが再び会務の執行を妨害すれば、私はもう責任を負う事ができない。日本側は昨年の共同経費を期限を過ぎても送つてこない。本会は金一家の私物ではない。……本会は画家の公有団体であり、一人一姓の者が進行を妨げる事は出来ない。北京本部は協定の範囲内で多数の同意を得て自由にその職権を行使し、絶対に他人の干渉を受けない。私は署名代表としていろいろと調整に努めてきたが、万策つきた。現に四月開会の期日がすぐ迫っている。昨年借りた会

費は返すことが出来ない。今年の開催経費は巨額になる。過日の幹事会には幹事の大多数が出席したが、やむを得ず開会延期を決定しただけである……。

『華陽画報』社主幹小塩美州は、同誌第九十号に次のような文章を載せた。⁽⁶¹⁾

本誌に屢々掲出したる、日華聯合展の真相は、その前途に暗雲の低迷せるを予告せしが果して何等かの形に於て、それが内部的か又外部的かの導因によつて、東方絵画協会と看板を塗り替へるに至つた。……然し爾来立消えの有様となつて居るが、依然支那美術界には紛擾が絶え間なく起りつ、ある、嘗て東方絵画協会と改称し、上野東京美術館に於て華々しく聯合展を開会せるが、その内容は充実せりと称したきも、単に申訳的の日支親善の展覽会を開きしに過ぎないやうに見えたが、対支文化事業部に於ては実に数万金を費したとの噂を耳にして、一驚を喫せざるを得なかつた。

然るに閉会后、北京部会長金紹城（金城）が日本を去つて上海に客死せるに及んで、会長後任問題に付き金紹城一派周肇祥一派と暗闘が続けられ、遂に昭和三年四月北京に於て開会せらる、筈であつた東方絵画協会の展覽会は立消えとなつた次第である。

昨年末より本年にかけての、会長問題に就いて二派の暗闘は頗る激甚であつた。その調停の目的で、日本側の委員の一人たる美術学校校長正木直彦外二氏が、北京に渡り日本領事館応援のもとに両者の調停に尽力せられたが、遂に不調となつて帰朝するに至つた。……問題の現在の北京部長たらんとせる周肇祥は、不肖渡支の際及びその他の通信によれば

利己主義の下劣なる者にして藝術家としては風上に置けない人物として不肖美州の印象と耳朶に残されているのである。……不肖美州その問題に付きて考ふれば、前会長の金氏の令息及齊白石氏等を以つて、重要な地位を与へ、多年協会に尽せし金氏一派を以つて、統一せしむるが最もよい策であらう……。

この文章の中で小塩は、齊白石が小塩に送った「東方絵画協会北京部は別の目的では非を争っている。私は巻き添えにされて名を傷つけないから退会する」という書簡を公開し、他にも画家から十数通の同じような書簡が寄せられていると記している。

東方絵画協会東京本部は、昭和三年（一九二八）六月二日付で、関係者一同に要旨次のような書簡⁽⁶²⁾を送った。

周肇祥から周名義または東方絵画協会北京本部の名義で、各方面に東京本部に対する不満を訴えているが、それは昨年中国側幹事金城が急死したのち、「周肇祥氏ハ独り権ヲ恣ニスル由ニテ、金紹城氏ノ門下画家トノ間ニ意見衝突シ、遂ニ金氏門下ヲ会ヨリ除名スルニ至リ、紛擾ヲ重ネ居ル為メ、昨秋東京本部ヨリ北京へ出張ノ際、関係人士ノ意見ヲ聞キ百方調停ヲ試ミタル結果、金派ノ有力者ヲ幹事ニ推薦シ一時妥協融和セシメ候処、当本部ノ一行ガ北京ヲ去リタル後周肇祥氏ガ依然態度ヲ改メサル為メ、妥協破レ再ヒ紛争ヲ続ケ」ている。周の主張は日本側と協議した取極書に署名したのは金と自分の二人であるから、金の死去後、「自分ガ会ノ権力ヲ握リ自分ノ方寸ニテ会務ヲ処理スルニ何ノ不可アラント云フニ有之候へ共、本会ハ素ト金城氏カ私財ヲ投シ最モ力ヲ竭シタ

ルニヨリテ、発達成長シタルモノナルカ故ニ、假令金氏死ストモ金氏門下ニ有力ナル画家多数アリテ、旧師ノ遺志ヲ継承スルモノアル限り、全然之ヲ疎外スルハ甚タ不穩当ニシテ同氏カ専断事ヲ行ハントスルハ一般支那人ノ反感ヲ懐ク所」で、本会中国側役員も周に反対するものが多く一般に信望を失い、近頃、ある事故で古物陳列所長の職を罷免されたということがある。周が最も熱心に主張するのは共同籌得の費用を折半して交付せよということである。本会は東方文化に貢献する事業を遂行するため一定の補助を受けることになっているが、事業の有無に関わらず助成金が交付されるのではない。周は予算書を送ってきたが北京では今何も出来ない状態であり、また、内紛のもとで一方に交付することは却つて紛糾を大きくすることになるから適当な時期まで助成金の申請をしないのが妥当である。本年は北京で展覧会開催の筈であるが内紛落着まで延期することにしたところ、周は内紛は中国側内部の問題であるから延期は不当と云っている。しかし東京本部は延期やむなしと考え、本年秋に本会を離れて唐宋元明名画展覧会を開催したく、中国側収蔵家と協議のため坂西中将、結城素明、渡辺晨畝を渡華させたところ、周が各方面に書簡を送っているので念の為お知らせする。

日本側は正木、渡辺による調停が不調に終わった後、王一亭、金開藩らを中国側責任者として中日絵画聯合展覧会開催の準備を進めた。

昭和三年（一九二八）十一月二十六日、東京会館で開かれた「日支聯合絵画展覧会ニ関スル協議会」には王一亭、方若、金開藩、闕鐸、正木直彦、坂西利八郎、小室翠雲、荒木十畝、渡辺晨畝、北浦大介、岡部長景が出席して次のことを協議した。⁽⁶³⁾

一、南京政府教育部美術展覽會（「教育部第一次全國美術展覽會」を指す）に領事館を介して外務省に出品依頼があり、合同すべきか否かについて協議し、（依頼は）西洋画が主であるから合同しないことに決定した。

二、聯合絵画展覽會は上海、天津、大連で開催することに全員賛成した。

三、開催の時期は昭和四年（一九二九）四、五月頃とする。

四、上海では王一亭を主任とし、龐萊臣、狄楚青、顧鶴逸が協力する。

五、天津では方若、金開藩を主とし、丁士源、孫潤宇が協力する。徐世昌、張弧など従来から関係のある名士も賛成しているから盛會を期待できると。

六、大連は多くの中国側名士が居住しているから、それら名士の出品を勧誘したい。

北京が開催地から外されたのは、そこが周肇祥たちの本拠地であったためであろう。代って天津が選ばれたのは北京に近く、居留日本人が多く、知日の中国人名士も多いためであり、大連もまた日本と協力関係を持つ中国人が多かったためと考えられる。

昭和四年（一九二九）二月五日、芝・金水で日本側だけの協議會が開催され、正木、坂西、小室、川合玉堂、結城素明、渡辺、北浦、岡部と事務官四人が出席し、次のことを協議した。⁽⁶⁴⁾

一、展覽會を東方絵画協會の名義で開催するか、あるいは中国側の内紛を考慮して日支聯合絵画展覽會、または東邦画會などの名義でするかは、今後の事情によって決定する。

二、上海の外、天津、大連の二ヶ所で開催するのは手数と経費その他の点で困難が多いから、どちらか一ヶ所としたいが、前回の中国側との協

議があるから更に協議する。

三、先ず五月中に上海で開催する。

協議内容はすぐに中国の金開藩などに伝えられ、二月十四日堀臨時代理公使は田中外務大臣宛てに「金開藩は上海、天津、大連の三ヶ所で開催したい意向である。大連を除いて、上海は王一亭と協議し、天津は金と方若が引き受けるから、天津開催期日を早めに決定し知らせしてほしいと希望している」旨公電を送った。三月二十七日、重光駐上海総領事は田中外務大臣宛に「各方面と相談の結果、中国側は今春開催することは準備が間に合わない、六月に入ると雨期になるから秋まで延期せざるを得ないという意見である」旨報告した。この連絡を受けて六月十日、岡部、正木、竹内、山元春挙、都路華香、荒木、小室、結城、小堀、渡辺、北浦、外務省文化事業部長坪上貞二らは星岡茶寮で協議會を開催、次のことを決めた。⁽⁶⁵⁾

一、開催期日は昭和四年（一九二九）十月二十五日から約二週間

二、場所は上海租界内

三、出品は帝展その他秋季展の関係上、七月三十一日までに制作すること。

四、大きさは幅三尺以内とし、なるべく表装すること。

五、出品作品を賣るときは、価格の一割を本會に寄附すること。

中国側は七月二十四日、上海四馬路の精進料理店覺林に幹事が集り、

一、会期は十月二十五日から二週間

二、会場は上海康腦脱路（現、康定路）の徐園

三、名称は中日絵画美術展覽會と改称すること。

四、役員は主席（特ニ會長ノ名称ヲ避ク）に王一亭、狄楚青、葉恭綽、會計に李祖韓

を選任した。代表の名称を「特ニ会長ノ名称ヲ避」けて主席としたのは、東方絵画協会北京本部会長を称する周肇祥一派との紛争を避けるためであったと考えられる。

昭和四年（一九二九）八月八日、『報知新聞』は「上海と大連で開く日華聯合の絵画展」の見出しで次のように報道した。⁽⁶⁶⁾

……計画中であつた日華聯合絵画展覧会はいよいよ十月廿五日から上海、次いで大連において開催することになった。この日華展は数年来、日支交歓展の名で、渡辺晨畝画伯によつて育まれていたものが、一段とスケールを大にしたもので、日華両国空前の新画大展覧会である。

日本側では東邦絵画協会長清浦伯以下川合玉堂、結城素明、小室翠雲、荒木十畝、小堀鞆音、山元春拳、竹内栖鳳、都路華香、菊池契月（以上帝展派）、横山大観、下村観山（院展派）、渡辺晨畝の諸画伯を幹事とし、支那側は蔣介石、王正廷両氏自ら賛助員に立ち、王一亭、葉恭綽両氏を幹事とし、両国共に政府後援という大規模のものである。従つて出品画家も日本側は帝展派は会員以下審査員、推薦特選及び常連を、院展側は院同人院友を網羅し東京百点、京都百点、大阪二十点の作品をまとめ、これに対し支那側からは、当代随一の王一亭画伯以下の代表作四百点を陳すべく規模内容とも日華総合第一の展覧会で、現代東洋美術の粹を一堂に蒐集したものである……。

八月十三日付『申報』（第十七面）は、「昨日正午、中国側は第三次發起人会を覺林で開催、三十余人が出席して、①名称を中日現代絵画展覧会出品会とすること、②委員制とし、委員は二十一人乃至二十九人、常務委員は五人

乃至七人とし、發起人会が推薦すること、③事務は総務、徴集、編集、陳列、会場の五班に分け、各班に委員の推薦する主任一名、幹事若干を置くこと、④経費は委員が分担徴集すること、⑤事務所を李祖韓宅におくことなどを決めた。ついで委員二十七名を選任後、会期を十一月一日からとし、期日が切迫しているため午後三時から委員会を開催した」と伝えた。『申報』は翌十四日（第十六面）「中日現代絵画展覧会出品会消息」で主席に葉恭綽が選任されたこと、徐園の賃料が十一月一日から十五日までで洋銀四百元であること、張善孖、李祖韓が日本副領事を訪ねて中国側の進捗状況を説明したことを伝え、出品規則全十四条を紹介した。

この頃から中国の新聞は、中日絵画聯合展覧会について報道や広告を掲載し始めた。金開藩は『湖社半月刊』や北京『順天時報』などに八月十六日から数回にわたつて「東方画会」の名で「本会は一昨年冬、東京で上海の王一亭、天津の方若、北京湖社の金開藩が画家たちと協議して組織し名付けたものである。上海で開催する中日絵画聯合展覧会は東方画会が行うもので、東方絵画協会とは全く無関係である」旨の声明を出した。一方、周肇祥は「東方絵画協会北京本部」名で「近頃各紙は、東方画会が十月上海で中日絵画聯合展覧会を開催することを伝えている。東方絵画協会は中日を代表して民国十五年、協定に署名したものである。日本側は協定を守らず、今展覧会を開催しようとしている。金開藩は会外の人であり、王一亭は本会幹事でありながら単独に行動している。これは国際信用に関わり、国家主権を顧みない輩がしていることで、東方文化の前途に害を及ぼすものである。内外の人士はよく知ってほしい」という要旨の声明をやはり『順天時報』に掲載した。九月四日、中日現代絵画展覧会出品会は、要旨次のような声明を出した。

今回中国固有の画法宣揚の目的で中日現代絵画展覧会を開催するについて、我々はその趣旨に賛同して出品会を組織した。ところが近來新聞報道によると、北方の一部人士には同展覧会について根本的に誤解があるように見受けられるので次ぎのように声明する。①本展覧会は絶対に金潜庵（開藩）の主催ではない。また東方画会の主弁でもない。いずれの団体とも関係なく、金潜庵は本会の代表権を持つものではない。②本展覧会は独立の企画で従来このような展覧会と連続関係はない。③大連で開催することは絶対になし、これまでもそのような計画があつたこととはない。④すべて中日平等で行ない、事務は一切公開し経費は折半分担保するもので、日本側に依頼する考えはない。各方面の出品を一律に歓迎する。⑤周・金両氏の葛藤については本会は与り知らない。一切の言論は本会の責任で公表したものに拠るべきで、個人単独の言動は会として責任を負わない。

両者の応酬は『順天時報』のほか『申報』などではほぼ二カ月続き、その間、在上海総領事館および在北京公使館と外務大臣幣原喜重郎との間には、周肇祥たちの反対運動について数回にわたって公電が往復された。⁽⁶⁷⁾中に十月四日付で堀内謙介代理公使から幣原外務大臣へ報告された周肇祥作成と推定される文書は、日華絵画聯合展覧会を取り巻く中国側の状況をよく伝えているので、その要旨を紹介しておくたい。

北方画家大多数同人は東方画会の上海・大連における日支絵画展覧会に対してはすでに新聞などで反対を表明し、東方絵画協会も全国に反対を通告した。しかるに最近、中日現代絵画展覧会出品会は新聞紙上で、

北方少数人士は本展覧会について根本的に誤解している。同会は金開藩あるいは東方画会の主持ではなく、如何なる団体とも関係がない、また大連で開催することは絶対になしと声明した。さらに九月二日の上海時報は王一亭の談話として、昨年、唐宋元明名画展覧会の時同人は上海で現代作品展覧会の開催を発起したところ、日本人が同意し実現に至つたもので、同会は大連では開催されないと報道したが、日本の出資、他の画会との関係の有無については明瞭でない。

日本画家の団体は我国のそれと違い極めて組織的で、政府を背景にして一切の対外関係はすべて政府の指示に従い、周到なる用意を以つて、遂に中国に代つて中国文化の主人公になろうとしている。北方人士が中日絵画聯合展覧会を処理したのは、我国政府の援助がないためやむを得ずしたことである。民国十五年（一九二六）締結の東方絵画協会簡章は、特に慎重を期し全国画家の統一進歩と対外的發展を企図している。それが同会の名称を中日絵画協会とせず東方絵画協会とした由縁である。文化について国家に一定の方針がなく、且つ我国画界の現状では日本と接触しても良好な結果を得られないことは明らかで、展覧会の如きはいたづらに日本画の宣伝となるだけで、中国画は將に日本化を受け、その画学は危殆に陥ることになるであろう。

唐宋元明名画展覧会開催当時は濟南事件直後で日中間の感情が悪化して、国交もほとんど断絶せんとする瀬戸際であつたため、故宮博物院は出品を拒否し政府も税関に輸出を禁止させたほどで、国民は一致して外国に当るべきであるにも拘わらず、敢然赴日して展覧会に参加せるが如きは全く賣国的行為で、吾人は根本的間違ひと思つており、北方人士の毫も与り知らぬところである。また上海閉会后、大連で開催するか

中日現代繪畫展覽會出品目錄 中國之部	
第一	丁仁輔之浙江杭縣人 號花 木 丹藤石麟
第二	丁愚別署六陽道人四川華陽人 號山水 溪山行旅
第三	丁士源字問樵浙江湖州人 號山水 設色山水
第四	號花 木 設色花卉
第五	號花 木 月 季
第六	丁慕冰女士江蘇江都人 號花 木 秋 光
第七	丁翰字墨農安徽懷寧人 號山水 溪山深秀
第八	丁惟澄字澗亭山東日照人 號山水 茅亭秋樹

挿図 8
『中日現代繪畫展覽會出品目錄 中国之部』 東京文化財研究所蔵

挿図 7
『現代名画 中日現代繪畫展覽會第一輯』 表紙 筆者蔵

も知れぬが、それは日本の招待によるものというが、上海画会の発起者たる王一亭などの責任であることは当然である。そして、王などが日本から金銭を受けていることは専らの評判である。ただ協定を守らないだけでなく、幹事でありながらこれを破壊するような行為は東方文化に害を及ぼすだけでなく主権領土を危殆に陥れるものと云うべきである。済南事件は解決したはいえ、国民の対日感情はまだ融洽するに到っていない。この際、何を苦勞して急遽開催する必要があるか。吾人は中日現代繪畫展覽會は損権辱国の挙と考え飽くまで反対するもので、大連での開催についても何人たるを問わず他のお先棒となるものは政府に

その懲罰を申請すべきである。

周肇祥の執拗な反対声明にも拘わらず、上海の画家の多数は中日現代繪畫展覽會に賛同したようである。「中日現代繪畫展覽會出品會組織大綱」⁽⁶⁹⁾によると、発起人に王一亭、王賢、吳湖帆、吳仲熊、曾農髯、黃賓虹、張大千、葉恭綽など上海の著名画家四十五名が名を列ねている。展覽會の準備は順調に進行し、『申報』八月二十日（第七面）、二十六日（第八面）に出品募集の広告が掲載された。八月十三日の『申報』（第十六面）、二十一日の『申報』（第十四面）および『上海新聞報』は中日繪畫展覽會出品會委員會が成立、十九日に第一次委員會が開催されたこと、日本側もすでに常務委員九名を選出し、中国の出品會に文書が発送されていることなどを伝えた。さらに十月十九日付『申報』（増刊第四面）は「中日現代繪畫展覽會は先に記名投票で鑑別委員に黃賓虹、王一亭、丁輔之、吳湖帆など十八名を選び、一昨日鑑別を開始した。今回の応募作品はすでに壺千四百余件に達している。北京方面の有名画家では齊白石、方若、蕭俊賢など、広東方面では趙浩、盧振寰、盧觀海、高奇峯、高劍父など、杭州方面では余紹宋、丁輔之、蘇州方面では顧鶴逸、陳摩などがある」と伝えた。日本国内では『時事新聞』が十月二十日に「日華融合の展覽會を開く」と報道したのに続き、十月二十六日には『報知新聞』「上海に開かれる日支美術展覽會、わが一流二百余名参加」、『中央新聞』、『東京朝日新聞』「日支聯合で空前の大繪畫會」などと一斉に報道された。

中日現代繪畫展覽會は十一月一日、上海徐園で開會、同十五日に閉會した。開幕式には張岳軍市長、重光葵総領事が祝辞を述べ、中国画家を代表して狄平子、葉恭綽が謝辞を述べた。出品は中国画四百四十五件、山水、人物、走獸、花木、草虫の五類に分けて展示され、日本側作品二百四十四件は分類せず

に陳列された。

十一月十一日『申報』(第十一面)は、「虎」署名の「參觀中日現代絵画展覽會記」を掲載したが、中国画の紹介が主で、日本画については渡辺晨畝「孔雀」、山口草平「雨の温泉」、上野秀鶴「梅花小禽」、小川翠村「黃鷄頭」、勝田蕉琴「八哥鳥」「白鷺」、松林桂月「台灣所見」などについて簡単な評語が記されているだけである。

上海展終了後、満鉄公処(名誉会長・張学良)主催、「中日文化協会出品」の名で十一月二十日から二十九日まで十日間、大連満鉄倶楽部で展覧、十二月四日から六日まで三日間、奉天(現瀋陽)城内旧宮殿で展覧された。上海展の「中日現代絵画展覽會出品会」の名称を用いなかったのは、先に触れたように周肇祥一派との重ねての紛争を避けたためと考えられる。奉天展については北京の『盛京時報』が予告記事(十一月三日、二十四日第四面)を載せ、十二月三日には開会式の様子を報道した。

この中日文化協会は一九二六年九月、満蒙文化協会(一九二〇年七月創立)を社団法人中日文化協会と名称変更したもので、大連に事務所を置き、定款第四条によると「会報、研究会、講演会、展覧会、視察旅行等ノ催誘其ノ他満蒙ニ於ケル有ラユル文化的施設ノ發達ヲ助長スヘキ手段ヲ講ス」ことを目的とした⁽⁷⁰⁾。同名の団体に、褚民誼の提案をもとに日本の興亜院が協力して一九四〇年七月汪兆銘の新国民政府下に設立された中日文化協会があるが、それとは別団体である。なお後者は上海、広東、武漢、無錫、北京、天津、河北その他各地に分会、支会を置き、『中日文化週刊』、『中日文化』月刊の刊行、日本から藤原義江、斉田愛子を招いた音楽会、日本書道報国会の展覧会、興亜造形文化展覧会などを開催した。『申報』によると、同上海分会は「中日文化協会上海分会主催参加全国第一次美術展覧會」(一九四二年九月二九日)

のほか、同分会発足以来二年余の間に中国画展・日本画展十一回、書道展八回、洋画展七回、木版画展三回(一九四三年二月三三日)、『中日漫画展』(一九四三年十月一日)を開催し、また、日本人を対象にした南画講習会、漢詩講習会、中国人を対象にした生け花講習会、版画講習会などを開催した。

奉天では森島總領事代理が本省に宛てて「展覧會は多大の成功を収めているが、期待に反し中国側の買上げがないので、日本側画家から数点買上げ要請があった。一行は当館の肝いりで特に当地に來たので五百円の支出を仰ぎたい」と要請したが、「予算の都合上、遺憾ながら支出しがたい」と回答された。なお、外務省は上海・大連・奉天展に対支文化事業特別会計事業費から助成費として二万円を支出した。

上海展では開會に合わせて『現代名画』(縦三十八・五センチ、横二十三・五センチ)が太平洋藝術社編集・発行で出版された。架蔵本は顧鶴逸、黃賓虹、李祖韓など二十六名の作品を収め、副題に「中日現代絵画展覽會第一輯」とあるが、第何輯まで出版されたかは不明である(挿図7)。また上海展では冊子『中日現代絵画展覽會出品目録 中国之部』(挿図8)と一枚物の『中日現代絵画展覽會日本側出品目録』が出版された。その内容は大連展で作成された冊子『中日文化協会出品目録』の「日本之部」とほぼ同じである。しかし、大連展の「中国之部」とは若干異同がある。

附・中日藝術同志会

中日現代絵画展覽會(第五回中日絵画聯合展覽會)が、周肇祥の反対運動にも拘わらず、好成绩を収めたことから、両国関係者の間に東方絵画協会に代って日中美術界の友好関係を維持増進するため、上海に中日藝術同志会を組織しようという気運が生まれた。中国側は王一亭、葉恭綽、狄楚青、日本側

は在上海の土屋計左右(三井銀行上海支店)、田中正一、堺与三吉を委員として同会は一九三〇年春設立された。在上海総領事重光葵は昭和五年(一九三〇)四月一日付で外務大臣幣原喜重郎に「中日藝術同志会簡則」全六条を添えて、「……過般渡欧又ハ支那旅行ノ途次来滬シタル横山大観、松岡映丘、福田平八郎等本邦画界ノ大家ハ各レモ右同志会ヲ通シテ支那側画家連ト交歓ヲ遂ケテ予想外ノ好成绩ヲ収メタル次第ナルカ、之カ費用等ニハ二三同志ニ於テ負担シ居ル実情ナル趣……就テハ本邦著名画伯ノ来遊多キ当地ニ右様機関ヲ設ケ、之ト接触セシムルハ最モ有意義ト思考セラルルニ付、右斡旋者側ノ希望ヲ容レ金貳千円ノ高支出方」を要請した。⁽⁷²⁾

同年秋、上海支店を離任、帰国する土屋に贈られた『贈土屋計左右先生画冊』に添えられた「中日藝術同志会」名簿(油印)⁽⁷³⁾には王一亭、狄楚青、黃賓虹、張澤、張大千、唐熊、潘天授、王賢、吳杏芬など上海の画家五十六名の名がある。同会その後の消息は伝わらないが、一九三一年十月、抗日を標榜する「中国画会」の成立後、自然消滅したものと考えられる。

日中両国の収蔵家から集めた宋元明清画三百余点と中国現代絵画五百点から成る「日華古今絵画展覧会」が一九三一年四月、東京府美術館で開催された。東方絵画協会が実質上主催した日華絵画聯合展覧会であった。しかし、

この年九月満州事変が勃発、続いて翌一九三二年一月第一次上海事変が起り、三月には満州国を成立させるなど、日本は中国侵出を強めていった。上海は、そのころの中国では日中両国の友好・協力関係が最も善く維持されていた都市で、中日美術協会、西湖有美書画社、中日絵画聯合展覧会、中日藝術同志会に見られるように、日本と友好・親善関係を保つ画家が多かった。しかし、東北地区に始まった日本の進出が次第に拡大するに従い、抗日の気運は徐々に上海の画家の間にも浸透して行き、一九三一年十月、画家による

最初の抗日団体「中国画会」が上海に組織された。十月十七日付『申報』(第十一面)「短訊」欄は「日本が遼寧・吉林に侵攻して以来、およそ我が同胞で怒髪天を衝かないものは居ない。上海居住の画家の大半は中日(藝術)同志会に所属していたが、国難に遭遇してからみな脱会した。賀天健、孫雪泥、鄭午昌、謝公展、熊松泉などは特に激烈で、張善孖、錢瘦鐵、馬企周などと諮って、中国画会を組織し一致して抗日に当ることにし、双十節(十月十日)に成立大会を開催した」と伝えた。一九三三年四月には北京中央公園で「藝術界抗日助捐展覧会」が開催されるなど、中国美術界に抗日の気運が次第に広がり濃くなつて行き、日中両国の美術家たちが協同で事業をすることは困難な状況になった。続いて一九三三年五月には馮玉祥らが抗日同盟軍を組織、一九三四年四月には宋慶齡、何香凝らの提唱で「中国人民対日作戰基本綱領」が発表された。翌一九三五年八月一日には中国共産党が「抗日救国宣言」を出し、十二月には北京を中心に抗日救国の学生運動が始まるなど抗日運動は全国に広がって行った。名実ともに日中聯合の絵画展覧会は一九二九年の「中日現代絵画展覧会」を最後とする。

余滴

一九三一年九月満州事変が勃発すると、中華民国政府は故宮博物院の文物の疎開を計画、一九三三年二月から五月にかけて五回に分けて上海に運ばれた。その後、日中間の緊張が強まると、上海から南京に運ばれ、相当数はさらに奥地へ疎開を続けたのち、日中戦争終了後、一旦は南京に戻ったが、国共内戦の激化に伴い、四八年十二月から四九年一月にかけて台湾に運ばれたことは周知のことである。⁽⁷⁴⁾ その間、一部分は北京を出たときの梱包のまま、故宮博物院南京分院保存庫に保管されていた。日本軍が南京を占領していた

時期（一九三七年十二月至四五年八月）、日本がその保存に協力したことが、昭和十八年十二月八日付で在中国特命全權大使谷正之から重光葵外務大臣宛に出された「行政院文物保管委員会成立ノ経緯及現況ノ件」⁽⁷⁵⁾に報告されているから紹介しておきたい。

……昭和八年早春ヨリ同年五月二巨ル間、五次二巨リ上海ヘノ移送ヲ行ヒ、其ノ箱数ハ合計一九、四九二ト言フ厩大ナ数ニ達シタ。更ニ民国二十五年南京ニ特ニ之カ為ニ故宮博物院南京保存庫及国立美術館陳列館（現国民政府軍参謀本部）カ新築サレ、逐次上海ヨリ右文物カ移送サレツツアツタ時、今次日支事変ニ際会シタノテアル。当時南京ニ仮ニ收藏サレタ数量ハ判然トシナイカ更ニコノ内相当量ヲ奥地ヘ搬送シタル模様テアル。我方カ保存工作ニ努力シタノハ即チコノ南京残存物テアル。……文物ノ収容ト整理 故宮博物院南京分院保存庫ハ事変ニ際会シテ換気並ニ排水ノ装置カ破損シ、其ノ儘ノ状態テ相当長期ニ巨リ放置サレイタカ、元来半ハ地下室構造ノ広大ナル三層倉庫テアル為、庫内ノ湿気ハ増加スル一方トナリ、下層ノ如キハ浸水カ蹊ヲ没スル程テアツタ。庫内ニ保管サレテイタ所蔵品ハ何レモ運送用木箱ニ荷造サレイタカ、此等最下層内ノ箱ヲ出来ル限リ上層ニ運搬スルトトモニ庫内ノ箱数ヲ調査シタ。此第一次整理ニ於テ保存庫内ノ湿害ノ程度カ判明スルトトモニ保管ノ箱数三、五七三箱ナルコトヲ確メラレタ……内容ハ各種美術品・清朝宮廷文献……美術品ハ元来旧清室ノ御物トモ言フヘキモノテアツテ書画・陶磁器・玉象牙等ノ文玩・銅器・楽器・鐘表・各種調度・衣料武具等ノ凡ユル美術工藝品ヲ網羅シ……。

日華（中日）絵画聯合展覽会について

なお、同文書は一九三七年秋、日本軍が江南一帯に侵攻した後、支那派遣軍特務部を中心に満鉄上海事務所、上海自然科学研究所、東亜同文書院が協力して占領地区図書文献接收委員会を組織して主に上海、南京、杭州、蘇州で図書文献の調査蒐集に当り、八十余万冊の貴重な図書文献を蒐集保全したことを伝えていることを付記しておきたい。

（〇三・九・二八脱、〇四・三・二七補訂）

註

- (1) 外務省外交史料館所蔵・外務省記録『展覧会関係雑件』第一卷所収
- (2) 康有為 一八五八—一九二七 清末の政治家・学者。広東南海の人。号は長素。戊戌変法の中心人物。
- (3) 劉海粟 一八九六—一九九四 画家・美術教育家。江蘇武進の人。号は海翁。十四歳で西洋画を学び、十六歳で上海图画美術院を創設した。
- (4) まさき なおひこ 一八六二—一九四〇 大阪府出身。号は十三松堂。東京帝大法科卒。奈良県尋常中学校長から文部省勤務、第一高等学校長を経て東京美術学校長に就任。
- (5) 張繼 一八八二—一九四七 政治家。河北滄県の人。字は溥泉。日本に留学、善隣書院、早稲田大学に学び、のち渡仏。辛亥革命後帰国して国民党創設に関わった。
- (6) 王一亭 一八六七—一九三七 浙江呉興の人。名は震。号は白龍山人。上海実業界の有力者で仏教を篤信し、書画に優れた。
- (7) くらだ せいき 一八六八—一九二四 洋画家。鹿児島の人。一八八四年渡仏してコランに学び、九三年帰国して白馬会を創立。東京美術学校西洋画科初代教授。
- (8) いじゅういん ひこきち 一八六四—一九二四 外交官。鹿児島の人。東京帝大卒。天津総領事、駐清国公使、外務省初代情報部長、外務大臣を歴任。
- (9) 吉田千鶴子「大村西崖と中国」一七—二〇頁。『東京芸術大学美術学部紀要』二九号、平成六年三月
- (10) 註9に同じ。吉田論文によるところが大きい。
- (11) 外交史料館『展覧会関係雑件』第一卷「大正十三年春季開催 北京・上海日華聯合絵画展覧会報告書」
- (12) 註9に同じ。十九頁
- (13) 全四卷、中央公論美術出版、昭和四十年

- (14) 『藝林旬刊』第六十―第六十八期、中国画学研究会編刊、民国十八年八月三十一日―同年十一月十一日
- (15) 『十三松堂日記』第一卷三八五頁、大正十五年二月二十六日「午後岡部長景氏來訪、渡辺晨畝も來訪、日華美術家聯合展覽會開催に付外務省より補助する考あるに依り十分効果あらしめたり、夫に付日本側取纏方を余に依頼する所ありたり」
- (16) 『十三松堂日記』第一卷三八五頁
- (17) 外交史料館『展覽會關係雜件』第五卷所収
- (18) 『十三松堂日記』第一卷四〇六頁
- (19) 同 第一卷四〇八頁
- (20) 外交史料館『東方絵画協会關係一件』所収
- (21) 金紹城 一八七八―一九二六 浙江呉県の人。紹城は原名、のち城に改める。外交史料館文書では金紹城と記されているが、本稿では通行に従い金城とした。字は拱北、号は北樓など。ケンブリッジ大学に留学、法律を学ぶ傍ら美術を勉強した。衆議院議員、國務院秘書を歴任、古物陳列所創設に関わった。徐世昌の援助を受けて周肇祥と中国画学研究会を北京に設立し『藝林月刊』『藝林旬刊』を発行した。日華絵画聯合展覽會には第一回から関わり、一九二六年第四回展のため來日、帰途上海で没した。
- (22) 周肇祥 一八八〇―一九五四 浙江紹興の人。号は養庵。法政学校卒。奉天警察局総弁、京師警察庁総監、古物陳列所長を歴任。のち中国画学研究会を十余年にわたって主宰。鑑識、書画に優れた。
- (23) 金開藩 一八九五―一九四六 画家。浙江呉県の人。金紹城の子。字は潜庵。一九二九年湖社を設立し、『湖社月刊』を発行した。
- (24) 北京での交渉については『十三松堂日記』第二卷五二四―五四三頁に詳しい。
- (25) 『十三松堂日記』昭和五年（一九三〇）三月二十日条「……渡辺晨畝來りて小室翠雲氏最近支那旅行に付、例の周金葛藤の居中を為さん希望のよし被申たりとて如何にすべきやと余の意見を糺されたるにより、これは先日外務省にて協議の如く東方絵画協会々約は一旦解約の事を申遣すことを定め、其趣を坂西中将より発信を乞ひたるにより其方針にて進むへしと申置きたり……」。
- (26) 外交史料館『展覽會關係雜件』第十卷所収「昭和九年日支聯合絵画展覽會二関スル件」
- (27) 飯野正仁編刊『滿州美術年表』一九九八年十二月
- (28) 『十三松堂日記』第四卷一五四四頁
- (29) 『北京週報』（編輯発行兼印刷人 藤原鎌兄、発行北京極東新信社）百十一号
- (大正十三年五月四日発行) 所載。国会図書館蔵。引用に当って、一部漢字を通行の字体に改め、読点を付し、明らかな誤字は正した。括弧内は筆者の註である。
- (30) ばんざい りはちろう 一八七二―一九五〇 陸軍軍人。和歌山の人。陸軍大学校卒業。清国で情報活動に當った。一九二四―二七年民国政府顧問をつとめた。
- (31) 秋山昱禧 三菱商事北京支店長。
- (32) 顔世清 一八六八―一九二九 広東連平の人。字は韵伯。直隸都督府外交庁長、總統府軍事參議、財政部印刷庁長を歴任。山水、花卉にすぐれ、東方絵画協会幹事をつとめた。
- (33) 周自齊 一八七一―一九二三 山東單県の人。袁世凱内閣で度支部副大臣、民国で山東都督、中国銀行総裁、交通部長、財政総長、教育総長を歴任。
- (34) 五四運動に続いて全国に広がった排日運動。
- (35) 靳雲鵬 一八七七―一九五一 軍人。山東濟寧の人。北洋武備学堂卒。段祺瑞門下の四天王と称され、徐世昌の下で國務總理兼陸軍総長をつとめた。
- (36) 黎元洪 一八六六―一九二八 軍人・政治家。湖北黃陂の人。辛亥革命では革命勢力を抑え、民国で袁世凱を支えた。一九一六年大總統に就任したが、復辟のとき、日本大使館に避難し大總統を退いた。
- (37) 外交史料館『展覽會關係雜件』第一卷所収
- (38) 註37に同じ。
- (39) 註37に同じ。
- (40) 第一次奉直戦争。奉天派（張作霖）と直隸派（呉佩孚）との間で行われた軍閥戦争。『北京週報』第十号は「京津だより」で齊白石、陳年、金城、陳衡恪、王雲など二十七名が渡日の予定と伝えた。
- (41) 故宮の天安門から午門に至る通路と東河沿の間、社稷壇を中心とする区域。民国期ここでたびたび美術展が催された。
- (42) 註37に同じ。
- (43) 註37に同じ。
- (44) 宣統帝溥儀（一九〇六―六七）は一九二二年二月に退位した後も、二四年十一月まで紫禁城に居住し、宣統の年号を用いた。
- (45) 紫禁城内、文華殿東の宮殿。
- (46) 外交史料館『展覽會關係雜件』第三卷所収
- (47) 註46に同じ。
- (48) 外交史料館『展覽會關係雜件』第三卷所収「第四回日華聯合絵画展覽會二対シ助成費交付二関スル高裁案」

- (49) 註48に同じ。
- (50) 『十三松堂日記』第一卷三七五頁
- (51) 外交史料館『展覧会関係雑件』第五卷所収
- (52) 大正十五年五月十六日発行、国会図書館蔵
- (53) 『北京週報』第百十一号「黄紫低昂」は、汪吉麟、湯滌、齊白石、賀良樸など元老連の画家たちが別派をつくり、北京画界同志会と名付け、三日北京郊外南口で歓迎会を催し、五日には前門に近い桜桃斜街の貴州会館で会員の作品を展覧したことを伝えている。
- (54) 外交史料館『東方絵画協会関係一件』所収「公第九六一号 絵画団体湖社成立ニ伴フ紛糾ニ関シ報告ノ件」
- (55) 湖社 前身は中国画学研究会。同会は大総統徐世昌の援助をうけて金城を会長に、周肇祥、陳衡恪、陳年、陶瑤らが一九二〇年五月北京で設立した。一九二六年に金城が急逝したのち、遺子金開藩と金城の門人が周肇祥から別れて湖社を設立した。一九二七年一月十五日成立大会を開催。上海を中心に会員二百余名を数えた。『湖社月刊』（百期まで）を刊行。
- (56) 正しくは中国画学研究会。金城没後は周肇祥が主宰してしばらく存続した。
- (57) 『十三松堂日記』第二卷五二四―五四三頁、また外交史料館『東方絵画協会関係一件』
- (58) 外交史料館『東方絵画協会関係一件』所収「昭和二年十一月二十一日芳沢発 田中外務大臣宛 第一二二六号」
- (59) 外交史料館『東方絵画協会関係一件』所収
- (60) 註59に同じ。
- (61) 外交史料館『東方絵画協会関係一件』所収、小塩美州「東方絵画協会の支那に於ける暗闘」
- (62) 外交史料館『展覧会関係雑件』第四卷所収
- (63) 外交史料館『展覧会関係雑件』第六卷
- (64) 註63に同じ。
- (65) 註63に同じ。
- (66) 外交史料館『展覧会関係雑件』第六卷所収
- (67) 外交史料館『展覧会関係雑件』第六卷内「重光総領事発 幣原外務大臣宛 第一〇〇九号 中日絵画展覧会ノ件」、「公第七八九号 堀内臨時代理公使発 幣原外務大臣宛 日支絵画展覧会ニ関スル件」、「公八〇八号 上海ニ於テ開催予定ノ日支画会ニ対シ周肇祥一派反対ノ件」、「公第九〇四号 中日現代絵画展覧会ニ対スル反対

日華(中日)絵画聯合展覧会について

- 運動ニ関スル件」
- (68) 外交史料館『展覧会関係雑件』第六卷所収「公第九〇四号 中日現代絵画展覧会ニ対スル反対運動ニ関スル件」
- (69) 外交史料館『展覧会関係雑件』第六卷所収
- (70) 『滿蒙』第七年第十二号附録「中日文化協会パンフレット・支那衣食住の常識」(大正十五年十二月一日発行) 所載、東洋文庫蔵
- (71) 外交史料館『各国ニ於ケル協会及文化団体関係雑件―中国ノ部』所収「日支文化協会(中日文化協会)」
- (72) 外交史料館『展覧会関係雑件』第十卷「機密第四六六号 中日藝術同志会へ補助金支出方稟請ノ件」。なお回答は添付されていない。
- (73) 鶴田武良編『民国期美術学校畢業同学録・美術団体会員録集成』(和泉市久保惣記念美術館紀要2・3・4合期) 一三四頁
- (74) 莊嚴『山堂清話』台湾・国立故宮博物院 民国六十九年八月刊、また筒井茂徳・松村茂樹訳『遺老が語る故宮博物院』二玄社、一九八五年十二月刊
- (75) 外交史料館『各国ニ於ケル文化事業関係雑件』所収「支大総文第九四号」